

The Bulletin of the Faculty of Global Communications

Cosmos



同志社大学グローバル・コミュニケーション学部機関誌

No.6

2017年3月

cosmos ['kɒzmos]

—①よく秩序づけられた宇宙。思考体系。

②キク科の観葉植物。

…花言葉 「調和」

cosmo- ['kɒzməʊ]

—（接頭語） 世界や宇宙に関する。

私は一つの可能性です。

私たちは無限の可能性です。

限り無く広がる世界の中で

調和をもたらす存在に成らんことを願い

これを題名とします。

References

Oxford Dictionaries. (<http://oxforddictionaries.com/definition/cosmos>)

流 希望 海 個 自 会

忙

界 実

道 進

動 漢

未

樂 波

交

輝 友 華 子

努 空

笑

Cosmos

No.6

— これらの漢字は、GCの学生たちが、
グローバル・コミュニケーションを
漢字一文字で表したものです。—



はじめに

この度はグローバル・コミュニケーション学部発行の学部機関誌 *Cosmos* 第6号を手にとっていただきまして、誠にありがとうございます。*Cosmos* は、多くの方々がこの学部を知っていただくため、また、学部内の学生への情報発信を目的として、学部開設以来、毎年発刊しています。

グローバル・コミュニケーション学部は2011年4月に同志社大学の13番目の学部として誕生いたしました。その名の通り、近年ますますグローバル化の進む社会において必要とされるコミュニケーションを多角的な視点から追究し、学生が自ら主体となって「世界へ通じる対話力」を身につけるべく日々精進しています。今年で7年目になる本学部では、社会人として巣立たれた先輩方の活躍もよく耳にします。

同志社大学は「グローバル・コミュニケーション」を冠する学部を設置した最初の大学ですが、近年、同じ名称の学部や留学を必修とする学部が日本全国に次々と誕生しています。この現象は本学部の取り組みが注目されている証拠であり、非常に喜ばしいことです。しかしながら、大学の内外を問わず、グローバル・コミュニケーション学部は単なる「語学学校」のようにとらえられている節があります。そのため、「TOEIC[®]何点？」など語学関連の資格の点数に関するのみに興味をもたれることが多いと感じています。高い語学力を評価していただいていることはうれしいことですが、本学部の「真」の魅力が理解されず、非常に残念に思っていました。実際は「語学」という枠組みを超えて、幅広い国際教養科目を学ぶことができ、また、様々な課外活動にも取り組んでいる、GC学部生の日常を知ってもらいたいとの思いが本号を執筆する原動力となりました。

そして、本年度をもちまして、本学部の開設と発展にご尽力してくださいました前学部長の中村久男先生がご退職になります。その記念としまして、中村久男先生と現学部長の南井正廣先生による「対談」の場を設けました。学部開設に至るまでの道のりと、将来の発展への思いが詰まっていますので、ぜひご一読いただければと思います。

本誌の編集過程では、在学生、卒業生、先生方、学部事務室の職員の方々にご協力いただきました。特に、編集委員の先生方には的確な指示と助言をいただきました。ここに感謝申し上げます。

それでは、最後までお楽しみください。

編集委員長 浅野 潤

表紙デザイン 後藤 友莉
内表紙デザイン 谷口 綾

Cosmos 第6号

目次

特集 GCの過去・現在・未来～新旧学部長に聞く～	4
GC学部 ゼミ特集	18
活躍するOB・OG	32
課外活動ニュース	34
GC発祥サークル	42
留学先からの声	
英語コース留学体験記	48
中国語コース留学体験記	56
留学生の声	62
GC学部の日常生活	66
2016年度卒業研究テーマ	72

特集

GCの過去・現在・未来 ～新旧学部長に聞く～

2016年度をもちまして、グローバル・コミュニケーション学部の初代学部長、中村久男先生がご退職になります。中村先生は長年にわたり同志社大学で教鞭をとられ、特に本学部の開設と発展にご尽力くださいました。ご退職に際しまして、学部開設の経緯、現在に至るまでの道のり、そして未来への展望を伺いたいと思い、現学部長の南井正廣先生と対談していただきました。本学部の開設にかけた思い、また実際に学生と接して感じた印象などを率直に語っていただきました。対談を通じて普段なかなか聞くことのできない、貴重なお話をたくさん聞くことができました。大変興味深い内容となっていますので、是非最後までお読みいただければと思います。

浅野 潤

出席者

【日時】2016年9月28日（水）13時～14時

【場所】香柏館1階 自学自習室

【対談者】

前学部長 中村 久男（なかむら ひさお）先生

現学部長 南井 正廣（みない まさひろ）先生

【モデレーター】

英語コース 4回生 井上 諒一（いのうえ りょういち）

4回生 桑原 菜々美（くわはら ななみ）

3回生 浅野 潤（あさの じゅん）

1回生 堺 遼哉（さかい りょうや）

中国語コース 4回生 野見山 玲奈（のみやま れな）



GC 学部開設について

浅野：まず、一つ目の質問なのですが、GC（＝グローバル・コミュニケーション学部）開設にあたって、どのような思いで開設されたのか、どのような事を学生に学んで欲しいと思って開設されたのでしょうか？

中村：言語文化教育研究センター（＝言文センター）という外国語の語学集団がありました。全部で81名の大きな集団です。そしてそれを2013年度の文系学部の今出川での統合に向けて、発展的に解消させて二つの新しい学部を作るという提案が、その当時の大学執行部からありました。一つは京田辺に外国語運用能力に卓越した人物の育成に特化した学部を作ること。それからもう一つは今出川に国際的な地域理解能力をもつ人物の育成に特化した学部を作るという提案があって、そこから話が始まったのです。けれど、ただ単に外国語

運用能力を高めるだけだったのなら大学以外でもできます。同志社大学の国際主義を進化発展させるという大きな目的の為に、もっと大きな学問体系としての柱が必要だったので。そして、その柱になったのがアメリカの21世紀の外国語教育の指針5C'sです。パンフレットとかにも載っています。皆さん知っていますか？

全員：（笑）

中村：その5C'sはCommunication, Cultures, Connections, Comparisons, Communities。これが学部カリキュラム設計の柱になっています。そして、外国語運用能力に卓越した人物の育成という大きな目的を達成するためには早い時期に海外留学（Study Abroad、以下SA）が必要という発想が出てきました。だから、実際にその外国語が使われている国なり地域なりに行ってもらおう。また、日本にいる学生たちが現地に行くことによって日本との違いを比較することができる。しかし、ただ単に対照比較するだけじゃまずい。だからどうするかというと、それをいかに繋げるかが大事。対照比較から、その地域や国を、外国語を通じて繋げる。そこから相互理解が生まれてくるだろうという発想があります。だから複数形のCommunities、複数形のComparisons、複数形のConnections、複数形のCulturesなのです。現地に行って、外国語を学ぶだけではなく、その外国語の背景となっている歴史・社会・文化等を実際に学び取ってくる。日本と外国の文化や社会や歴史を比較し、繋げていくという発想です。そういうことを通してコミュニケーション能力を高めてもらいたいというのがこの学部の元々の発想です。カリキュラムもすべてそこから出ています。単に外国語運用能力を高めるだけで終わるのではなく、最終的にはコミュニケーション能力を高めたいというのがこの学部の発想です。ですから、学部名にコミュニケーションが冠されたわけです。

南井：「グローバル」については、一昔前、国際という言葉が流行ったけれど、それですら10年、20年すると色褪せてきている。「グローバル」も、いずれ時間と共に色褪せる。何故そのような名前を付けるんだという批判もありました。

中村：私たちにとっては、グローバルという言葉よりもコミュニケーションという言葉の方が重要で、上が国際になろうともコミュニケーションは譲るつもりはありませんでした。コミュニケーションの重要性を身に付けていただきたい。母国語によるコミュニケーション能力だけでなく、高い外国語運用能力を用いてコミュニケーション能力を身に付けてもらいた



い。そして、そういった能力を持って、Facilitator, Negotiator, Administrator という役割をグローバルな状況の中で担えるような人物を育成するというのが最初のコンセプトです。だから、そこから Study Abroad が出てきたし、実践的かつ実用的な英語、中国語、日本語の運用能力を高めていくためのカリキュラムができました。そして、最終的に、実践的な学部としてセミナープロジェクトを行うという発想になっていきました。やはり中心になるのはコミュニケーションです。

全員： そうだったんですか。

中村： こういう役割を担える人たちはいつの時代にもあらゆる場面で必要ですね。

GC 学部生の印象

井上： 実際に学部ができて、どういう予想のもと、カリキュラムを作られたのですか？そして、実際に学生が入ってきて、予想と違う点はありませんか？

中村： カリキュラムはあくまでも教員の方が、こういう学生が入ってきて、こういう学生に育ててほしいという、教育の柱の部分です。そしてそこに実際に人格を持った人たちが来るわけです。英語能力なり、中国語能力なり、日本語能力なりを持った人たちが来るんです。それをいかにブラッシュアップしていった最終的にこの学部が求めている人物の育成に近づけていくのが大きな問題だったわけです。でも、正直に言って学生さんたちの能力が非常に高かった。

全員： おおー！（歓喜）

浅野： 手元の資料を見てみたんですが、英語コースの目標点数として TOEIC[®]750点、TOEFL[®] テスト iBT79点っていうのがあるんです。かなり低いというか、すぐに達成できてしまう人が多いように感じます（笑）。

中村： 確かに英語コースの TOEIC[®] テストの平均点で高いときには861点くらいだったと思います。中国語コースにしても初修の人の方が数としては圧倒的に多いのですが、それでも HSK の5級、6級を取得します。そういう学生さんたちが非常に多く育ち、私はそれを嬉しい誤算と呼んでいます（笑）。思ったより学生さんの能力が高かった。そして、外国語能力だけじゃなくて、まず、やる気がすごくある学生さんが多い。例えば、オープンキャンパスは1期生の英語コースの2、3人からやりたいと要望があったのです。そしてすごく成功しました。学生が自らの学部を紹介する、自分たちの言葉で学部を紹介したいっていう、そういう発想を持つこと自体が非常に珍しいケースです。しかも、それを現実に体系化して実行してしまったのです。他のコースも当然巻き込んで。だから、最初から全く我々が予想していなかった発想をもちそれをやり遂げてくれる。ゼロスタートからですよ。それをすることができる能力のある人たちがいました。それから、この *Cosmos*、これはグローバル・コミュニケーション学会という学会組織が発刊しています。私はこの学会を教員だけのものにはしたくなかった。それで、学生さんたちのためにも何かできないかなと思って、学生さん向けの冊子を作ろうという発想を教員側がしました。じゃあ、それをどう作るかという時になって、学生さんたちを編集委員として入れたらいいという思いがありました。それで、募集をかけたのです。最初は、誰も応募してこなかった。それで私がよく知ってい

た中国語コースのある学生さんに頼んだら、じゃあやりますと言って英語コースにも声かけてみますということで広まっていったのです。これもゼロスタートですね。学生さんたちが何を主題として雑誌を作って世に出すのか。このあたりになると、もう教員の手を離れています。当然、教員は指導はしますが発想とかテーマとかは学生さんが主体です。だから、学生主体で動いていける。そういう人たちがこの学部にはいました。今もいます。そこがこの学部の強みだと思います。しかも、それを1年限りで終わらせはしない。オープンキャンパスも年々すごくなっています。

南井：それを見て次にやりたいという人が出てきて、現にやっていますからね。

中村：そういう次の代に繋げていく、やりがいのあることだということを上級生が身をもって示してくれているから、次の代もやってみたい、あるいは高校生もオープンキャンパスで学部生による学部紹介をみてあの学部に行きたいと、そういうところにまで今はなっていると思います。学力、外国語能力だけではなくて、非常に個性的でユニークな人も多いのだけれども、ひとつにまとまって何かをしようとするときには一致団結できる、そしてそれをやり遂げてくれる。ゼロスタートからでも最終的には形あるものとしてくれる。そういう点ではこの学部の学生さんは非常に能力的に高い。ですから、これは社会に出ても役に立つ能力を持ち合わせているのだと思います。それも思っていたよりも高い能力を持っているということで、うれしい誤算です。

学生：うれしい誤算ですね。

井上：南井先生も何かありますか？

南井：1期生に恵まれたというか、皆さん語学能力のほかにやる気があり、一から作っていくということを精力的にしてくれたので、それに続いて後輩たちもどんどん取り組んでくれているということですね。全体的に言えるのは、皆さん言葉ができるだけじゃなくて、プレゼンテーション能力が高い、これは学部に入ってから教育の成果もありますが、それが大きいなと思いますね。

浅野：良いことをたくさん話していただいたのですが、もちろん予想外の（笑）悪い意味での誤算というのもあったと思うのですが…。

野見山：本当の誤算（笑）。

中村：誤算だったら学生さん側にあったかもしれない。1期生でもすぐにやめた人がいました。それはこちらが思った誤算ではなくて、入った側が思った学部ではなく、やめていった人には我々のカリキュラムなり、授業のやり方なりが合わなかったのでしょうか。我々の誤算というより、入ってきた人たちの誤算かな。何人もが割と早くやめましたね。

南井：何人もいましたね。

中村：こちらが思い描いた学部と、入った学生が思っていた学部と違ったということは当然あったらろうし、もしかしたら同じ同志社の他の学部に行ったほうが実力が発揮できた人もいるわけです。

井上：授業内でこういう授業をしていこうということはあったと思いますが、実際に授業を通じて変えていったことなどないですか？

南井：ゼミを担当していて、よく思うことがあります。英語コースの場合、2回生で海外に出ることは皆さんにとってすごく魅力的だし、大きな経験となるのでいいと思います。しかし、1回生で2回生のための語学のトレーニングをして、2回生でSAに行って、なんでも好きな科目を取ってきなさいというと、3回生でゼミが始まるときに、もちろん興味があるゼミを選ぶのですが、すべて「ご破算で願います。」と映りがちです。例えば文学部英文学科だと、1年、2年、3年と、留学しないとしても、それなりに積み上げていくこととなります。それらがGC学部生には薄くなります。例えば長谷部先生のところで言語学をやりたいけれども、言語学のことはほとんど知らない状態とか。そんな形にどうもなってしまうので、そこに3回生、4回生とかのゼミの指導で若干悩むところですよ。それと、本をあまり読まないというのかな、発表能力が高いので、リサーチ能力を上げるのが目標ですね。しかし、他の学部では1、2回生の内にやっていることを、3回生のゼミでやらないといけないという苦労をどの先生もされていると思います。



中村：もう一つ、グローバル・コミュニケーションといっても学問体系としてもそれほどはっきりしたものでもなかったもので、1回生では毎日外国語の鍛錬に明けくれていたかなという感じがあると思いますね。2回生になってぼっと外国に放り出されて、向こうでこちらのカリキュラムに対応できる科目をとってきなさいと言われても、なかなか何をとればいいのか、というのがあるのかもしれない。そういう点では私たちが考えていたよりも学生さんが「あれ」と思うことがあるかもしれないですね。ちょっと自分たちにとってはどういう道筋がついているのか見えにくい。特に1、2回生はわかりにくい。南井先生がおっしゃる体系化とい

う点ではわかりにくいかもしれませんね。丸々1年抜けるわけだし、でもそのSAの1年が、かえってこの学部の特徴にもなっています。たとえば他の学部、よく英語コースと重なるといわれる、英文学科とも全く違うカリキュラム体系。英文学科でも1年次は語学能力を引き上げるカリキュラムが組まれています。でも2回生になると全然違う。何が違うかと言うと、あなたたちは全員海外に行く。日本語コースの学生さんたちは最初から4年間日本での海外留学ですが、あなたたちは日本から海外に出て何かを学び取っていく。ご遊学じゃないんです。留学です。自分たちで選び取って、学ばなければならない。そこでは自主性も育つだろうし、交渉能力も高まるだろうし、あなたたちの思っている以上の成果は学問的な成果以上のものがついてくると思います。外国語運用能力以上のものを身につけて戻ってくる。SAが入るので学部での学びが体系的ではないと思えるかもしれないけど、3、4回生で興味がある分野に移るとそれまでのいろんな経験が生きてくると思います。どうですか英語コースの人たち、そんな感じはしますか？

井上・浅野：そうですねー。

井上：知らず知らずのうちに交渉もしたし…。主張もしたし…。

全員：(笑)

中村：それが5C'sと関係して、最終的にはコミュニケーションとなっていく。英語コースではできるだけ早い時期に海外に行かそうとの思いがあったのです。しかし中国語コースははじめて中国語を学ぶ人を対象としているので、基礎固めにはやはり一年半かかるというので、だから2回生の後半からということにはなっています。できるだけ早くです！(笑)

南井：2年くらい前、同志社大学 OB でサッカー元日本代表の宮本さんに GC のために講演とパネルディスカッションをお願いしました。彼は現役時代、国際試合でレフリーに対して英語で抗議をしていましたよね。だから、ここで学んだ学びというのは学問的には3、4年ではしんどいこともあると思いますが、今中村先生がおっしゃったように多分そういうことが留学を通して、例えばネイティブの先生に抗議に行くといったことが、普通にできちゃうということですよね。これは世の中に出て、いつもニコニコして黙っているというのでは通らない時代だし、その意味では大事な能力を養っていると思いますね。

GC の強みとは？

野見山：今、話された中で、学生と先生の距離感というものも関係があるのかなと思うのですが、私たちも高校の時よりも先生が近く感じられます。大学って、一方的に教えられる、ひたすら授業を聞くというか、何百人の中で授業を聞くという学生がほとんどだと思うのですが、先生方もこれまで学生との距離が近いと感じられていますか？

中村：それは語学運用能力を高めるためには、少人数クラスが絶対必要というので、外国語教育に関しては小クラス編成にしたということと関係があると思います。読む、聞く、書く、話す、の四技能を高めるために科目が設定されているわけですけど、そのどれもが小規模です。そうすると先生と接する機会が多くなり、先生も課題はしょっちゅう出す（笑）。で発表させられる。プレゼンテーション能力が高まっていく。こう、悪循環ではなく好循環を起こしていると思いますね。だから、学生さんたちが先生を身近に感じているというのはありがたいですし、その通りだと思います。

南井：僕はスタッフだと思いますね。職員の方も含め、学生と接するのが好きな先生が圧倒的に多いですね。

中村：だから、それだけこの学部が充実したのだと思います。先生方の個々の努力と充実したカリキュラム。

堺：GR（＝グローバル地域文化学部）との違いでいうと、まずは留学期間の違いがありますね。

中村：それと語学体系が全学の語学体系です。GC は学部独自の語学体系。外国語運用能力に特化した学部というのが前提としてあるから、そこは譲れない。

南井：だから、GR で中国語を勉強すると全学共通教養教育科目（外国語教育科目）のインテンシブを利用しています。うちは GC 用で週6、7回しているでしょう？全然違うのです。GR は1週間以上のプログラムに参加したら卒業可能になる。うちの場合は1年の留学が必須です。やはりそれは大きな違いだと思います。

堺：僕も受験の際に GC と GR で迷って最終的に約1年間の SA に惹かれて GC にしました。やはり SA は譲れないものなのですか？

南井：そうですね。今の時代、外の世界に行かなければ外国語やコミュニケーションを学ぶということはあり得ないと考えていました。GC では、当然1年間留学させるしかあり得ないだろうという状況でした。

中村：それから学内的に英文学科とどう差異化するかという問題がありました。英文学科には3本の柱があります。英米（英語圏の）文学・英語学・英語教育です。GCは実践的な学部ということでその実践性をより高めるためにSAが必須になってきました。そして英語・中国語・日本語の3つのコースをまとめて実践的な学部を証明したいのでセミナープロジェクトという科目ができました。セミナープロジェクトも教員がテーマをあらかじめ設定して行っているのではなく、学生からテーマを募集して行うという学生の主体性重視の姿勢を取っています。これがこの学部の強みです。その強みを学生さんたちは発揮してくれるだけの能力を持っている。それは誇らしい事です。

井上：カリキュラム変更などさまざまに変化していますが、今後はどのような展開をお考えですか？

南井：2017年度生からを対象に教職課程を作る計画が進んでいます。2013年度から英文学科が今出川に移ってしまい、GCの学生が英文学科の教職課程の授業を取ることが不可能になってしまったことが契機になっています。それから学生にアンケートを取ったところ8割以上の学生から教職免許の希望があったので、計画を進めました。GCでは教職免許を取らなかったのも、オープンキャンパスでも教職免許に関する質問が多かったのも、今回の計画は非常に良い事であったと考えています。それを武器にしてさらに良くなっていこうと思います。カリキュラム改革に関しては数年に1回は見直しています。例えば英語コースの第二言語に関しては、留学という1年の空白期間を超えてもう一度、半年第二言語を学ぶというのは授業が成り立ちにくいということから、負担は軽くして、留学後も学習を続けたい学生は全学向けの上級クラスを取ってもらうという方針にしました。それから英語コースでは1回生のTOEFL[®]の秋学期の授業をなくしました。中国語コースでは基礎ゼミで中国語圏のことをよく学習しているので、英語コースもそれに倣って、文化関係や言語学関係などを先生が授業して学生がレポートを作成するような授業を入れるということにしました。留学から帰国後、3、4回生でどのようなことを学習するのかを最低限知っておいてほしいということもあり、カリキュラムを改正しました。

野見山：毎週火曜に会議が行われていると聞いたのですが、カリキュラム改革のことなどについて話し合っているのですか？



南井：そうですね、例えばこれは他の学部ではあまりやってはいないかと思うのですが、欠席が多い学生に関して、先生の中で情報共有して、多くの授業で欠席していれば呼び出したりしますね。何度呼び出しても変化がなかった学生には学部長が対応することもあります。学期末にはそれぞれの授業のレビューをしています。なので、なんとなく学生、授業の様子はつかめています。

野見山：それは少人数制であるがゆえに一人ひとりの学生を見ることができるといえることがありますか？

南井：それはそうですね。教員一人に対する学生の数がGCでは大体1:10なのでできることですね。

中村：大規模な他学部でも1回生のときには少人数クラス編成をとって一人ひとりを見るということをするようになってきてはいます。この大きな同志社大学の中でも少人数教育の重要性が認識されつつあるとは思いますが。ただ規模の大きな学部はやはり大講義室での授業が自ずと多くなります。それに比べればGCは規模が小さい分、少人数クラス編成が可能なのです。それによって先生方の目が一人ひとりの学生に行き届いているのかなと思っています。そして先生方の連携が常に行われていますね。

南井：一般的に大学の先生というのはあまり横のつながりがなく、先生同志で自分のクラスや授業について話さないといわれたりもするのですが、GCでは、少しでも良くしていこうと考える先生が多いので、レビューなどが盛んに行われています。なので、いい意味でカリキュラム改革が進んでいると言えますね。

中村：たとえば、いくつもあるリーディングのクラスでも、コーディネーターが中心となってその科目をどう進めていくか、皆で話し合いながらまとめあげていくので、中心となるところはブレません。それぞれの先生が好き勝手に、リーディングのクラスの授業を行うのではなくて、リーディングのクラスの内容を他の先生と話し合いながら授業を進めているので、かなりきめ細やかで入念な授業運営になっていると思います。

南井：学部長だとしても容赦なくコーディネーターに当てられてましたよね（笑）。

中村：それと誤算のもう一つとしてSAで取ってくる単位が20~25くらいだろうと考えていました。25単位行けば素晴らしいだろうと思っていたら、多い人は35~36単位もGCの学部単位として認定される。

南井：夏学期がある場合には、40単位を認定された学生もいましたよね。

中村：考えていたよりも認定単位数が多いという嬉しい誤算がありました。中国語コースも考えていた以上に認定単位数が多かったですね。

野見山：でも英語コースよりは少ないですよ。

中村：平均すれば中国語コースは24単位ほどで、英語コースはバラつきがあるので、中国語コースのほうが多いのではないかと思います。中国語コースの学生でアカデミック（現地学生が取る授業）を取って単位を修得してくる学生もいたのも、それは驚きでした。学部カリキュラム構想の段階では、英語コースの学生はなんとかアカデミックを取ってくるだろうと考えていましたが、中国語コースではそれは無理だろうと考えていました。1期生からアカデ

ミックで単位を取ってくる学生がいたのは本当に驚きでした。

野見山：例年北京大学ではアカデミックに参加できるので1～2人はアカデミックで単位を取ってきていますね。ただでさえ北京大学に在籍している学生の学力が高いのにそこでアカデミックを取ってくるのはすごいですよね。

中村：北京大学は世界大学ランキング2015-2016版では、アジア2位ですからね。

野見山：中国語コースで言えば現地で有名な国立の3大学と英語コースも5か国15大学と協定を結んでいます、どのようにその協定を結んでいるのですか？

中村：中国語コースは中西先生、郭先生を中心に担当の先生方があちらの大学へ行って交渉して協定を結びました。英語コースもそうですね。大学間協定でSA先が選ばれているのではなく、学部間協定なので学部の先生が現地大学へ出向いて交渉して協定校を得なければなりませんでした。

野見山：英語コースは協定校が年々増えているイメージですが。

中村：アメリカのアリゾナ大学、カナダのゲルフ大学が追加されました。

南井：アリゾナ大学人気ですよ。

中村：どの留学先も学部の先生方が現地へ赴いて交渉して契約を得るとい形です。大学の交換留学制度とは違いますね。GCの先生方は本当に身軽に動いてくださる先生が多いですね。

野見山：ある程度選択肢があって、そこから選んで交渉に至るとい形なのですか？

中村：英語コースの場合は安全な所というのが第一にありますね。カリフォルニアでもロサンゼルスを外している理由がそれです。アメリカの東海岸は、直通便でいける所が少ないので難しいですね。何か起きたときに直通便で帰って来られる所というのが条件です。2001年にテロが起きて以来、安全性が問題になってきているので。

南井：前身の言文センターで、短期留学プログラムの担当だった頃、2001年のアメリカに対するテロ攻撃や、SARSがあったり、色々な経験をしているので、より安全な所という思考がどうしてもありますよね。

中村：全学向け短期留学プログラムとしてサマープログラム、スプリングプログラム、セメスタープログラムとかがあります。そういったプログラムは学部以前の言文センターのときから経験しているのです。そこでのノウハウが生かされていると思います。

野見山・浅野：ありがとうございます。

井上：GCの今後というところに戻りたいのですが、学部を創設されたときの世界の情勢と今、近年の情勢は変わってきていると思うのですが、それについてどう考えられているかということ、今GCが出来てからの数年を合わせてどのような人材を育てていきたいかというのを簡単にお話しいただけますか？

中村：簡単に（笑）なかなか難しい（笑）

南井：学部を開設して10年くらい経つと、だいたい定員割れしたり、そういったことが起こって

いるんですね。GCも2020年に10年目を迎えるのですが、そこまでに出来る限りのことはしておきたいと考えています。教職に関して、英語で教職が取れないというのは学部の弱みなのでそこをなんとか埋めておいて、将来に臨みたい。SA先に関しては、大学の入れ替わりはあるかもしれないけれども、増やすつもりは今のところ考えていません。定員が増えない限りはないのではないかなと思っています。そういった形で今後に向けて今までの状況をさらに磨き上げていきたいと思っていますね。幸いにも皆さんが知っている通り、『週刊ダイヤモンド』（2016年9月24日号）の関関同立特集で、GCの評価がすごく高いんです。

学生全員：いえ————い！！（拍手）

中村：手元にあるので読んでみます。「関関同立の国際系学部の最高峰は同志社大学のグローバル・コミュニケーション学部。」（2016年9月24日号より引用）

学生全員：うお~~~~~！！（歓喜）

南井：ということがあるので！この評価を維持していきたいのですが、維持していくだけでは良くないので、さらに攻めの姿勢でいっそう良い教育をしていきたいと思います。我々そして先生方の力を借りてどんどん動いていくことで、これが保っていけるとしています。そういう姿勢で臨んでいきたいと思っています。国際情勢うんぬんは一言では言い切れないので難しいですね。SA先を替えざるをえないようなことが起こるかもしれない。だから、平和であることをもちろん願っているし、普段は全然為替レートの事なんて考えないのですが、こういう学部預かると、本当にそういったところが気になるのが正直なところ。だから、波乱が起こらず、落ち着いて行ってくたらいいなと思います。ただ、世の中はどんどん世知辛くなっていったり、社会の面でも厳しくなっていると思うので、そういう中で、太刀打ち出来るような、もちろん語学力は基本だけれども、それ以外に「語学で何をするのか」。それと5C'sで言ったけれども、自分で交渉したり出来るような、そういった人物をこれからもお育ていかないと思っています。せっかく留学しても、何も出来ないというのも困るので。学問的にはちょっとしんどい面があるかもしれないけど、やはり社会で役立つ人物というのを育てていきたいと思うし、そのためには教員の方は協力を惜しまない。GCの先生方は皆さんそう思っていて、また先生方にそのように思っただけるところが、この学部の強みかなと思います。



井上：ありがとうございます。

GC カラーとは？

浅野：今、この学部が出来て6年目ですが、学年によって様々なカラーがあると思います。その学年ごとのカラーと、6年間で共通して言えることはありますか？

中村：私は昨日、吉田先生に聞いて、今日は玉井先生にも尋ねてみました。学年ごとにカラーがあるとえば、あるのだけれどもやはり、1期生の印象が強いというのが共通する印象です。1期生がどういう人たちであったかという、非常に個性的で、ユニークな人たちで、そして野心的であった。野心的というのは、いい意味でね。だから、そういう人たちが一定の道筋を付けてくれたのです。先ほど話題にした、オープンキャンパスにしても、Cosmosにしてもそうです。SAにしても、最初に行く人たちですからね（笑）。まさに、パス・ファインダー、道を見つける人たちですよ。ですから、道筋をつけてくれた上で、2期生以降の人たちがうまくそれを繋げてくれています。それぞれが優秀であって、1期生から受け継いだものを断絶するのではなくて、発展的に継承していつてくれているというのが現状かな（笑）。個々のカラーというところまで、ちょっと言い切れない、というのがお二人の印象でした。

南井：私は、ずっと学部が出来て以来1回生のリーディングを教えています。年によって、変な言い方だけど懐き方が違うというか…（笑）。

中村：それはそうですね（笑）。

南井：1期生は割と離れた感じだったんですけど、3期生は、何か自分たちからどんどん言ったり、席とかも勝手に「席替えしましょう！」と言ったりして、高校生みたいな感じ（笑）。クラスも関係するかもしれないけれど、それぞれに違って面白いなと思っていますね。

井上：共通することはありますか？

中村：やる気（笑）。

南井：やはり外国語でもやろうかというような人たちだから、グローバルでフレンドリーで、皆仲良くしていこうとか、先生たちと喋ってみようとか、そういった人たちが多いのでは確かですね。

中村：プレゼンテーション能力が高い。

南井：それもそうですね。

中村：なかなかこうはいかないですよ。押しなべてプレゼンテーション能力が高い。

堺：関西一優秀なので（笑）。

全員：（笑）

野見山：（笑）ありがとうございます。

中村先生から南井先生へメッセージ

浅野：今後のことに関して、中村先生から南井先生に対して何か…。それを受けて、南井先生が中村先生のご意向にお応えして何か…（笑）。

中村：難しいな～～（笑）。

南井：ご意向どうぞ！（笑）

中村：私が積み残したことが、教職課程と日本語コースの大幅なカリキュラム改革です。今はもうそれも動いてくださっているんで、特に私としては思い残すことがないのです。学部完成までの4年間は文部科学省のお目付けが入っていたので、なかなか自由な発想ができなかったのですが、それがもう取れたので、これからはもっと自由な発想の下にカリキュラムも直すべきところは直していただければいいのかなと思います。私は超保守的な人間なのでなかなか重い腰を上げられないのですが、南井先生は積極的に動く方なので、期待しています。



全員：（笑）

南井：中村先生ってね、僕が1987年に同志社に入社した時に同じ工学部におられて、歳は8つぐらい違うんですけど、良い意味でお兄さんみたいな感じで仲良くさせてもらっていたので…。こうして改まって言うというのは、なんなのですが、さっきも言ったように、教職課程も出来るという見込みが立っているんで、あとはもう細かいことをいろいろと整備して行って、先生の意思を引き継ぎ、実現できればと思っています。今は学部長を辞められてここ（香柏館）の7階に座ってくださっているだけでも、ありがたいですし、困った時に、電話したり相談したり出来る人がいるのはありがたいです。GC学部長をしたのは中村先生しかいないので。だから、色々な意味で今年は頼りにしながら、学部運営をしているのが正直なところですよ。2017年度からは、残念ながら教えには来られず、籠られるらしいんですけど（笑）、恐らく、今後も離れたところから、引き続きいろいろと様子を見てくれるのではないかと思います。

中村：私が2016年度末で定年退職なのです。

南井：引き続き見守っていただけると思うので、またアドバイスとかいただけたらと思いますし、先生が望まれている形で、私も学部の運営を続けていきたいと思っています。

中村：それともう一つだけ付け加えるとしたら、やはりこれから新しい人たちがどんどん入ってくるので、これからね。そしてこれから退職する人たちがどんどん増えていくのです（笑）。そうなってくると、この学部がどういう成り立ちでどんな風に作られていったか、そしてこの学部の良さがどこにあるのかということが、どこか霞んでしまう可能性があるかもしれないので、それを次代に伝えていくことが必要になってくるなと思います。それを今の学部長、そして次はどなたになるかわからないですが、次の学部長に引き継いでいただきたいと思っています。

全員：ありがとうございます。

学生へのメッセージ

浅野 & 野見山：これが本当に最後の質問です… (笑)。

浅野：卒業生、在学学生そして未来の GC 生にメッセージを一言ずつ。

中村：ある人物紹介によってメッセージとします。NHK『ラジオ深夜便』の「明日への言葉」で、すごく面白いインタビューがあったので紹介します。先川祐次さんがゲストで、御年96歳。96歳という高齢にもかかわらず、今も、九州大学で外国、特にアジアから来た人たちに日本語を教えるボランティアをしています。それで、この方の経歴がべらぼうに面白い。彼は旧満州建国大学という昭和13年から終戦の年までわずかな期間存在した大学に学びました。この大学の方針は五族共和、つまり5つの民族が一つになるという考え方。150人の学生の内、半数が日本人、中国人が55人、ほかに台湾、モンゴル、朝鮮とロシアからの学生が在籍しており、朝から晩まで一緒にいると喧嘩もするが兄弟のようになったそうです。軍国主義の時代にもかかわらず、この大学だけは例外的に非常に自由な大学でした。ともかく軍部が介入するまでは。万里の長城を越えてシンガポールまで踏破するというとんでもない計画を学友と決行し、途中でつかまり、仕方なく断念というエピソードを語り、この冒険旅行があったからこそ、のちにシナイ半島で国連軍の従軍記者をしたときに、ケロツとできたと言います。卒業後、彼は外交官を志願して、外務省に勤めるのです。広報課に配属されるのですが、広報課というのは実は情報部門、つまりスパイ。やがて終戦。郷里である福岡に戻ってみるとあたりは焼野原で、焼け残っているのはデパートと新聞社の建物だけだったそうです。これからどうやって生きていこうかと、まあデパートか新聞社かというわけですよ。そして新聞社、西日本新聞に勤めることになるのです。その西日本新聞に在籍のまま、フルブライト奨学生になって、アメリカに留学。帰国後は、ケネディ政権下のワシントンをはじめ、さまざまな国々で特派員を務めています。まさに波乱万丈の人生。彼は、次のように述べています。「色んな民族と話し合ったが、独りよがりだということがわかって、コミュニケーションが人間の付き合いの中で一番大事だということがわかりました。国と国との関係もそうですが、会社のなかでも仕事をする上で一番大事なのは、上手い円滑なコミュニケーションをどうするか、いかに努力をするかということを知りました。」まさにあなたたちの学部、この学部に対応しいコミュニケーションの大切さ。この学部ではコミュニケーションの大切さを学んでもらっているし、これから入ってくる学生さんたちもそうです。この96歳の長い人生を歩んできた人が、学びとった大切さはコミュニケーションだと言っているのですね。あなたたちの人生、80年としましょう、その中で20分の1にしか過ぎない、たった4年、そういう短い期間をこの大学で学び、そしてこのグローバル・コミュニケーション学部で学ぶわけですが、ここで学んだことをどう生かしていくかというのは、本人次第です。本当に。どういう生き方をするのかもわかりませんが、社会に出てからも、GCで学んだ核の一つとしてコミュニケーションの大切さをいついつまでも持っていていただきたいと思います。以上です。(笑)

全員：ありがとうございます！

南井：僕は、いつもお世話になった人とかに自分の本にメッセージを付けて渡すのですが、多くの場合は“Where there's a will, there's a way.”という言葉ですね。「意志のあるところに、やる気のあるところに、道は出来る」という言葉を添えます。難しい言い方をしたら、「精神一到何事か成らざらん」。何事をするにも、そのやろうという気持ちがあればやれないわけで。この学部に来た人たちは、やる気はもちろんあると思います。GCとの関わり方って人それぞれに自由だと思うのです。でもやはり何かこう、やる気があってそれを何か残していきたい、そういう道は何となくここにいたらそれなりに見えてくるような、そんな教育は我々しているはずだと信じているので、そういう風な形で学部というものを利用したり、楽しんでくれたら良いかなと思いますね。もう一回言うけれど、関わり方は自由だと思うので、ここに来て何かを自分で見つけて、そしてやる気を出して自分で進むべき道を見つけてくれたらいいかなと思います。以上です。

全員：ありがとうございます。



GC 学部 ゼミ特集



テーマは「言語だけじゃないGC学部」。今号では「語学以上のGC学部」を発信しています。

「じゃあ、言語以外に何を勉強しているんだ」、と疑問に思われる読者の方もいらっしゃるかもしれません。そのような方には是非この後に続く特集を一読していただければと思います。「なるほど」と思っただけだと確信しています。

現在、GC学部には英語コース7、中国語コース4、日本語コース3、合計14のゼミがあります。それぞれのゼミではそれぞれの専門分野からグローバル世界やそこにおけるコミュニケーションをめぐる 이슈について学んでいます。もちろん、ゼミでは英語・中国語・日本語を使います。ですが、これらの言語はあくまで専門分野を学ぶための「ツール」です。学生は鍛え上げてきた言語能力を駆使して、コミュニケーションの諸相について議論し理解を深め、卒業研究のテーマを自らが見つけ出し、探究していきます。

さて、前置きはこれぐらいにしておいて、我こそはと名乗りを上げ、本特集の記事を執筆してくれた学生の熱い思いを感じ取っていただければと思います。

土田 大樹

松木ゼミ 英語コース3回生

千原葵子

1. 私にとってのゼミ

私にとってゼミとは、最高の学びの場であり、週の中で一番楽しみにしている授業でもあります。松木ゼミは、ディスカッションがメインのゼミです。ディスカッションと聞くと、少し殺伐とした雰囲気を想像してしまうかもしれませんが、ゼミのメンバー全員が互いの意見を尊重し、他のメンバーの話に熱心に耳を傾けるような人ばかりなので、毎回楽しく実りの多いディスカッションとなっています。ゼミは、新たな知識や観点を得ることのできる貴重な機会となっています。

2. 松木ゼミの魅力、印象、学んでいること

松木ゼミの魅力は先生と学生の距離が近いことです。先生と学生の仲が良いので、授業中はとても和気藹々とした雰囲気で、教室が笑いの渦に包まれることもあります。ゼミでは言語人類学と観光学を学んでいます。メインは言語人類学なので、春学期は言語人類学の基本的概念について勉強しましたが、秋学期は観光学にフォーカスして、大衆観光や観光名所で働いている人たちのパフォーマンス、そして今後の観光のリスクについて勉強しています。

3. ゼミの横と縦の繋がりとそこから見える「GCらしさ」

今のところ、私の学年の松木ゼミには縦の繋がりはありません。ゼミのメンバーはサークル活動やバイトをやっている人がほとんどなので、メンバー全員で飲み会をする機会は少ないですが、授業前はずっとおしゃべりをしています。ゼミや学部という枠にとらわれず、自立して自分の好きなことをしている姿勢が「GCらしい」と私は思っています。



1. 私にとってのゼミ

私にとってのゼミは「良き師と良き友と共に、方言の世界を探る」場所です。意欲に溢れた同級生と膨大な知識で私たちを導いてくれる吉田先生、大学4年間の集大成となる研究をするにふさわしい環境といえます。

2. 吉田ゼミの魅力、印象、学んでいること

吉田ゼミでは言語学（音声学・音韻論）を通じて英語と日本語のバラエティを学んでいます。英語は国際共通言語ですが、「英語」と一言で言っても、イギリス英語、アメリカ英語、インド英語など、各地に様々なバラエティが広がっています。その各国の英語のアクセントや方言の違いを知ることがコミュニケーションの円滑化につながります。また、よく知っている日本語の方言の違いを音韻論、社会言語学の観点から研究することによって、言語の本質に深く触れ、言語への更なる理解を深めることができます。

3. ゼミの横と縦の繋がりとそこから見える「GCらしさ」

現在、4回生の吉田ゼミは男子3人（1人休学中）、女子8人の11人です。先生や先輩、後輩を交えて飲み会をしたり、皆で伊勢に旅行に行ったり、授業外でもとても仲良くさせてもらっています。少人数の学部、コミュニケーション能力に長けている人が多いということもあって、先輩、後輩、また先生とも気軽に話しやすく、深い仲を築けるのはGC学部の良いところだと思います。



1. 私にとってのゼミ

自分の好きなものにじっくりと取り組ませてもらえる環境があると思います。私は自由意志の表象について、他のメンバーはAIや三國志、アイデンティティなど様々なトピックに取り組んでいます。何よりも、玉井先生が時に優しく、時に厳しく人生の先輩として指導して下さるので、ゼミの内容に囚われずに様々なことについて考えることが出来ます。私にとっては週に1回、脳に汗をかけるという感じです。

2. 玉井ゼミの魅力、印象、学んでいること

玉井ゼミでは文化表象学（Cultural Representation）について学んでいます。3回生では主に博物館学と文学作品の表象を、4回生ではそれぞれが選んだ作品を分析して、論文執筆に取り組んでいます。物事を多面的かつ多層的に分析する力と論理的思考力を養うことができるため、今後どのような分野に進んでも応用することが出来ます。概念的なことを学んでいるので一見難しそうですが、2年かけて学ぶに相応しい内容です。ディスカッションの時間も多く、安心して意見交換が出来る環境があるので、ゼミ生全員で学びを深めている印象です。

3. ゼミの横と縦の繋がりとそこから見える「GCらしさ」

同期はそんなにべったりとした関係ではないですが、飲み会ではずっと話し続けています。玉井先生も含め、全員の関心分野や向いている方向は違いますが、それぞれがグローバルな感覚を持ち、自立しているので、ゼミ内で異文化交流が来ているという感じがGCっぽくて私は好きです。2期生の先輩方とは繋がりがありましたが、3・4期生はあまり交流がないので…今後のゼミ会開催を期待！（笑）



1. 私にとってのゼミ

私にとってゼミとは、「考える場」です。受講者が何百人という大教室で受ける授業とは違い、13人という少人数のクラスであり、それぞれの学生が発言できる場所でもあります。ゼミでは毎週社会言語学のあるトピックについて学び、考え、先生と学生で議論します。授業の内容が若干哲学的で難しいので、授業の終わりまで議論ははっきりとした結論に至らず、私はいつも帰りの電車の中で一人考え込んでいます。窪田ゼミは、そんな「考える」機会をたくさん与えてくれる授業だと思います。

2. 窪田ゼミの魅力、印象、学んでいること

「社会言語学」はあまり馴染みのないものだと思います。取り扱っている内容の例を挙げると、「『男女』という単語はどうして『女男』ではないのか。その言葉に影響を与える男性社会」といったような、言語とそれに影響を与える社会について毎週学んでいます。社会言語学で有名なフレーズに、“Make the familiar strange.”（当たり前前かがり前でなくなる）というのがありますが、このゼミに所属しているとこのことがよく分かります。窪田先生のおもしろい授業に魅せられたメンバーは皆個性豊かで、毎週笑いの絶えないクラスになっています。

3. ゼミの横と縦の繋がりとそこから見える「GCらしさ」

ゼミ開始以降、4回生の先輩方は就職活動に勤しんでおられたので、交流会といったものは一度行われたただけでした。ですがそろそろ先輩方の就職活動も終わり、今年末には早稲田大学の社会言語学のゼミと合同で交流会を開くことになっているので、そこからさらに関係を深められればなと思います。GC学部自体人数がそんなに多くないので、将来のキャリア等についていろいろな方からアドバイスをもらえる機会が多いのも特徴です。



1. 私にとってのゼミ

専門知識を深めることはもちろん、学問を超えた学びを得ることが出来る場所だと感じています。毎週の授業では、各回担当者がテキストを読み込み、そこから得た知識を発表すると共に、ディスカッションを通して意見交換をしています。自ら情報を得、正しく伝える能力、そして、相手の意見を受け入れつつ、自分の意見を主張する能力など、ビジネス・コミュニケーションにおいて必要不可欠な能力を学んでいます。また、竹田ゼミには様々な考え方、価値観を持った人が集まっています。そのため、毎回新しい知識や、考え方を発見することができる場所です。私にとってゼミとは、社会に出る直前の3回生、4回生が社会人として必要な能力を学ぶことができる場所だと考えています。

2. 竹田ゼミの魅力、印象、学んでいること

竹田ゼミは「グローバル・ビジネス・コミュニケーション」を学ぶゼミです。このゼミの魅力はその学問を「体感」することができる点だと思います。課外授業として、マイアミ大学の学生と合同授業を行ったり、シンガポールを訪れ、実際にビジネスをされている方の生の声を聞いたりします。海外の学生とイベントを企画したり、最前線で戦うビジネスパーソンに会ったりすることで、テキストからは学ぶことの出来ない「グローバル・ビジネス・コミュニケーション」の難しさや面白さを体験することが出来ます。このように、ビジネス経験のない大学生にとって、それに近い経験が出来るのが竹田ゼミでの学びであり、魅力だと思います。

3. ゼミの横と縦の繋がりとそこから見える「GCらしさ」

竹田ゼミは横の繋がりでだけでなく、縦の繋がりも強いゼミです。毎年、秋学期にゼミ合宿を行います。ここでは、4回生が3回生に就職活動の体験談を、OB・OGが3回生に社会人としての経験を伝える場になっています。先輩が学んだ事を後輩に繋げることは、GC学部の随所に見られる流れであり、「GCらしさ」となっていると感じます。



1. 私にとってのゼミ

私にとってゼミとは、好奇心を引き出してくれる場です。言語に関する現象を、先生とゼミ生全員が参加するディスカッションを通して学んでいます。普段は考えもしないような視点から言語現象を考察していくことは非常に興味深いと感じています。もっと知りたい、もっと学びたいという意欲が湧いてくる、そんな授業です。

2. 長谷部ゼミの魅力、印象、学んでいること

長谷部ゼミの魅力は、学生が発言しやすいことです。ゼミの雰囲気は穏やかで、先生もゼミ生も互いの意見を尊重しあうことを大切にしています。一人ひとりが真剣に課題に取り組んでいることも、このゼミの良さであると思います。ゼミでは認知言語学を学んでいます。人の認知がどのように言語表現に影響するかです。一見難しそうですが、普段当たり前を使う言語について深く考え、その考察をどのように応用できるかということに大きな可能性を感じています。ゼミ論文では特定の言語現象について考察を深めたり、広告・教育・政治などの分野に応用を試みたりと、一人ひとりが自分の興味に合わせて研究を進めています。

3. ゼミの横と縦の繋がりとそこから見える「GCらしさ」

長谷部ゼミでは3・4回生合同で年に数回懇親会を行い、また秋学期にはゼミ合宿を実施しています。先生にも毎回参加していただいています。去年のゼミ合宿では懇親会だけではなく、就職活動についての相談、認知言語学の知識を深めるアクティビティーを行いました。楽しいことも真面目なことも、年次や立場を超えて共有する機会があることは、とても「GCらしい」と考えています。



1. 私にとってのゼミ

私にとってゼミとは学生生活の核であり、最も力を入れている授業です。実践を重視する多くのGC科目とは違い、じっくり文献を読み込みそれについて発表するというアカデミックなスタイルであることも大きな魅力です。また最新のニュースについてディスカッションしたり、業界・企業研究発表を行ったり、皆で情報を共有することが多く、幅広い知識を身につけることができます。

2. 南井ゼミの魅力、印象、学んでいること

南井ゼミでは17世紀ごろにヨーロッパに流入したコーヒー、紅茶、砂糖などの嗜好品が、ヨーロッパ社会にどのような影響を与え、変化をとげたのかを学んでいます。今ではイギリスの象徴ともいえる紅茶が、元々異国の産品であり珍しいものとして扱われていたことなど、日々新たな発見の連続です。書評などの自主課題に関してはテーマが緩やかに設定されているので、自分の興味のある本、分野についてレポートを書くことができます。興味を持ったものについてさらに深く学んでほしいという南井先生の思いが込められていると思います。

3. ゼミの横と縦の繋がりとそこから見える「GCらしさ」

ゼミの最大の魅力といえるのが縦の繋がりです。南井ゼミは現在2年目と若いゼミですが、飲み会、ゼミ合宿、ハロウィンパーティー、クリスマスパーティーなど、先生と3回生、4回生が交流できる機会が多くあります。また、ゼミ以外でも先輩にお世話になることが多く、とても頼りになります。小規模学部のGCだからこそ、このような強い縦の繋がりが実現できたと思います。



1. 私にとってのゼミ

私にとってゼミとは中国語学習における集大成の場です。Study Abroad(海外留学)から帰ってきてからのゼミでは、郭先生が中国語のみを使って授業を行うので、培ってきた中国語スキルをフル活用し、高度な内容でも自然に発言しあえる良い場になっていると感じます。

2. 郭ゼミの魅力、印象、学んでいること

郭先生のゼミでは現代中国語と文化について扱う内容が多いです。ゼミ生は中国語の文法や流行語から、中国語圏の風習、中華圏の現代社会に至るまで比較的広い範囲から研究テーマを選ぶ事ができます。ここ1、2年、ゼミ生で休学して下の学年に入るメンバーが多く、流動性が激しいですが、うまくクロスオーバーしています。比較的自由的な雰囲気 of ゼミです。今年は4回生が同志社びわこリトリートセンターで合宿を行い、真剣な議論を重ねて卒業研究も完成に近づきました。

3. ゼミの横と縦の繋がりとそこから見える「GCらしさ」

郭先生のゼミでは4回生とSA 出発直前の2回生が交流会を開き、SA に向けてのアドバイスや情報を共有します。そしてSA から3回生が帰ってくると、4回生と就活の情報共有会を開きます。SA の制度上1つ上や下の学年のゼミ生と早い段階で仲を深める事は難しいですが、直接的にも、あるいは間接的にも繋がる事ができます。同期のゼミ生の仲がいいのはもちろん、卒業研究では助け合うことも多いです。SA での各学年の出入り、休学していた人との交流を通して柔軟に繋がりをあえる、自由度の高いゼミです。



1. 私にとってのゼミ

私にとってゼミは、「中国語力の更なる向上」を目指してきた4年間の集大成の場です。この学部に入学を決めた時から、私の4年間の目標は語学力の向上でした。留学を経て、卒業も間近になり、卒業研究のテーマを決める際に、一時は論文にしようかと考えましたが、原点に戻り「小説の翻訳」を選びました。中国語でのコミュニケーションは容易にできても、正直書き言葉や現代中国語の理解などは欠如している部分があったためです。

2. 中西ゼミの魅力、印象、学んでいること

小説の翻訳とゼミを通して主に3つ学んでいます。1つは、中国語の文章の背景をしっかりと汲み取り、正確に翻訳すること。2つ目は、文章の前後の脈絡などを考慮し、時には意識をすること。そして3つ目は、翻訳を通しての語彙力の向上です。特に正確に翻訳することに関していうと、私が翻訳したものを、中西先生に丁寧に読んでいただき、細かなアドバイスをいただけるので、ミスが目立つ時もありますが確実に成長していると感じます。

3. ゼミの横と縦の繋がりとそこから見える「GCらしさ」

現状では縦の繋がりはなく、年末に交流会を予定しています。横の繋がりでいうと頻りに集まるわけではありませんが、一度飲み会を、一度泊まりでバーベキューをしました。ゼミ中もお互いの論文や翻訳をしっかりと読みあってフィードバックや翻訳の訂正などをして良い関係が築けていると思っています。



1. 私にとってのゼミ

私にとってゼミとは視野を広げる場です。唐ゼミは比較的人数が多く、4回生は15人の学生が所属しています。ゼミで話し合う際には、15人それぞれが積極的に意見を出すので自分ひとりでは気づかなかったアイデアや視点に出会う瞬間がしばしばあります。ただ問題を指摘するだけでなく、こういうデータがあるともっといいな、役に立ちそうな文献があるよ、という意見が多く出る点もとても勉強になります。こうしてゼミで身に付ける力は今後も多方面で活かすことができると考えています。

2. 唐ゼミの魅力、印象、学んでいること

唐ゼミは学生が留学経験をふまえ、自分が興味を持ったことや深く追究したい事柄についてテーマを設定し、卒業研究に取り組んでいます。皆それぞれ異なるテーマで、政治、経済、環境、文化など幅広い分野に及ぶため、他のメンバーの発表は非常に興味深く、毎回新たな知識を得ることができる点が魅力だと感じています。

3. ゼミの横と縦の繋がりとそこから見える「GCらしさ」

普段はゼミの縦の繋がりは少ないですが、留学前に交流会を開き、これから留学に行くゼミの後輩にアドバイスをしたり、先輩の経験を聞いたりする機会を設けています。また年末には就職活動相談会があり、就職活動を終えて間もない先輩方から様々な情報を教えていただきました。全員に留学という大きな共通点があるので、アドバイスや相談も先輩後輩関係なく気軽にできるところが「GCらしさ」だと思います。



1. 私にとってのゼミ

興味のある分野はもちろん、知識を広く深く身につけることができ、同じ志を持った仲間と勉学を通してお互いを高め合える場だと思います。同じ問題を考えていても、それぞれ違った見方や考え方を共有することができ、新しい見方を知った時はとても面白いです。

2. 内田ゼミの魅力、印象、学んでいること

1つ目の魅力はストイックなところ。本当に皆が自分に対して厳しく、学年を重ねるごとに、発表回数を重ねるごとにクオリティが上がっているように感じます。2つ目は、世の中の様々な事柄に興味を持てること。授業内で新聞記事を取り扱ったりするので、幅広く様々な事柄に触れることができ、必然的に興味を持つようになったのではないかと思います。

3. ゼミの横と縦の繋がりとそこから見える「GCらしさ」

内田ゼミは縦の繋がりが強いと思います。よく縦コンも開催していて、色んな先輩、後輩と知り合える機会も多く、同じ留学先の先輩や後輩と出会えたときは、経験を共有できるので、GCらしいなと思います。横は縦の繋がりに強靱で、4年経った今となっては「一緒に苦難を乗り越えてきた戦友」って感じです。特に就職活動が本格化して以降、とてもゼミの仲間には救われたなと思います。些細なことでも情報を共有したり、就活で発表が出来ないときは協力して交代しながら進めたりするなど、学業面においてもとても助けられることが多かったです。元々学部全体の人数が少なく皆お互いをよく知っている上に、同じゼミの仲間となるとそれ以上の絆ができると思います。



1. 私にとってのゼミ

私は、ゼミを通して言語学を真剣に研究することができたと思います。GC 学部では、様々な言語を学ぶ機会がありますが、ゼミでは、学んできた言語学に絞って、集中して研究することができます。1つの言語にこだわることなく、学んできた事柄を生かして深めていくのが、ゼミの魅力だと思います。

2. 山森ゼミの魅力、印象、学んでいること

私は、連体修飾形の「タ形」について研究しています。

以前、私が「韓国語と日本語には似ている単語が多い」と言ったところ、「ああ、似た単語ですね」と正されたことがありました。それがきっかけで、研究を始めたのですが、実際に連体修飾の「タ形」の中には、「～した」の形が動詞の過去の意味ではなく、ひとつの文の中で、形容詞的な意味で働いていることに気づかされました。さらに、連体修飾の「タ形」について学ぶうちに、ひとつの動詞の品詞が変わり、修飾する動詞にも影響を与えることに興味をわいてきました。今後は、韓国語における連体修飾形を研究し、日本語と比較していくことを目標としています。

3. ゼミの横と縦の繋がりとそこから見える「GCらしさ」

GC 学部では、様々な言語を学ぶ機会があります。特に、日本語コースにおいては、母語を日本語に通訳する授業が設けられているため、2つの言語の違いを探り出す点が興味深かったです。韓国語母語話者である私からみて、韓国語と日本語には文法や発音など共通点が数多くあります。それにもかかわらず、実際に訳す時は、思考による言語の差が感じ取れました。このように、言語学習だけに偏るのではなく、言語の中に含まれている考え方や文化も身につけられるのが、「GCらしさ」と言えるのではないかと思います。



1. 私にとってのゼミ

私にとって、ゼミは少人数の研究会みたいなものです。私が所属しているゼミは、須藤先生の指導の下で論文を書きます。授業では、文献を読んで、分析します。そして、自分が書きたい論文の内容をゼミで発表して、議論します。ゼミのお陰で、先生と学生の距離が近くなりました。普段困っていることがあれば、先生が相談に乗ってくれます。就職活動の時には、先生からアドバイスをもらいました。

2. 須藤ゼミの魅力、印象、学んでいること

私が所属しているゼミでは、6人の学生がいます。中国人3人、韓国人2人とロシア人1人です。中国出身の私は授業中に、論文に関することだけではなく、韓国とロシアのことも学べるのが魅力です。ゼミでは、音声学を学んでいます。卒業論文のために、音声学に関する文献をたくさん読みました。春学期の終わりに、ゼミの皆と飲み会に行きました。飲み会では、皆で授業外の話がたくさんして、楽しかったです。

3. ゼミの横と縦の繋がりとそこから見える「GCらしさ」

このゼミに所属しているメンバーは音声を研究していますので、例えばある学生は日本語母語話者の音声と中国語母語の日本語学習者の音声を比較しています。実験をするときに、日本人の協力者が必要ですから、このゼミを通じて、日本人の学生さんと知り合えます。これは「GCらしさ」だと思っています。



1. 私にとってのゼミ

私にとってゼミとは、「自分の成長」を実感できる場です。大学生活を通して学んできた様々なことを、まとめ直し、整理する、いわば自身の大学生活の集大成の場でもあります。先生の指導により、「いま、自身の知識の枠から一步踏み出すきっかけを得た」という実感を得ながら成長することができます。特に、ゼミという少人数の授業体制は、先生と熱い討論を交わしたいと考えていた私のような学生にとって、絶好の場であると感じています。

2. 脇田ゼミの魅力、印象、学んでいること

脇田ゼミの魅力は、留学生だけで構成されているという点にあります。授業では多様な観点を持ち寄り、どんなことでも素直に話し合うことができます。文化の違いから起こる思想や経験の共有は、脇田ゼミならではの魅力であり、他の授業では得難い貴重なものだと思います。私が所属している今年の脇田ゼミでは、主に文化による行動様式の相違点について学んでいます。中でも私は、韓国語と日本語の方言の認識の違いを比較・分析し、役割語としての方言が翻訳にいかに関与するかについて研究しています。

3. ゼミの横と縦の繋がりとそこから見える「GCらしさ」

脇田ゼミには、様々な国からの学生が所属しています。ゼミの学生は皆、互いにオープンな態度で接し合います。縦の繋がりだけではなく、横の繋がりも大切にし、お互いを尊重する雰囲気を持ち合わせているように思います。このように、先生を求心点として、様々な文化的背景を持つ学生たちがまとまり、活動しているところが、GC学部ならではの感じています。



活躍するOB・OG

本学部は今年（2017年）で7年目になります。卒業された1期生、2期生の先輩方は多方面で活躍されています。今回、英語コース2期生の佐藤雅也さんとお話することができました。佐藤さんは卒業後、京都大学大学院に進学されました。本学部での学びを生かしながら、より専門的な研究に日々励まれています。大学院での生活や研究内容について詳しく伺うことができ、大変興味深い内容になっています。本学部での学びについて考える上でも、とても参考になるお話だと思います。

浅野 潤

プロフィール

佐藤 雅也（さとう まさや）さん

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻 言語科学講座 修士1回生
英語コース2期生（長谷部ゼミ所属） 2016年3月卒業

1. 大学院生活の1日について簡単に教えてください。

私が在籍する修士課程（博士前期課程）は2年間あります。その間に必要な単位の取得、修士論文の執筆を行い、その論文に学位の価値があると認められると晴れて修士となるわけです。2年間で22単位（11コマ分）を取得する必要がありますが、M2（修士2年目）になると修士論文の執筆で授業に出る時間的余裕がなくなるため、M1のほとんどが今年度中に全ての単位を取り終えるプランで授業を組むことになります。



私の場合、前期は月・火・金曜日に1コマ、水曜日に3コマの授業をとりました。木曜日にはフォーラムという研究発表会が研究室で開催されます。毎週行われるこのフォーラムは13:00-18:30で行われ、院生が研究の進捗を発表し、議論します。研究は一人で行うもの、というイメージが一般的に散見されますが、私の研究室では「議論を通して叩き合いながら成長していく」というスタンスで各々が自らの研究に磨きをかけているように思えます。

大学院での一番の特徴は研究室での生活です。院生はほとんどの時間を研究室で先行文献を読んだり統計処理を行ったりと、研究に時間を使います。私の研究室の多くの人も休日を含む授業時間外は深夜まで研究室におり、私自身1週間のうちで研究室にいる時間が100時間を越える場合も多々あります。

2. 現在の専門研究内容について教えてください。

理論言語学のパラダイムで項構造について研究しています。項構造とは、[S V O1 O2]（S = 主語、V = 動詞、O = 目的語）という二重目的語構文の「型」のような抽象構文です。このような抽象構文は、ヒト特有のスキーマ化や音韻ループ（ワーキングメモリ）の認知能力に根ざしているがために現在の形に収斂しました（ただし、長谷部先生の黒田・長谷部（2009）の

パターン束理論ではスキーマ化を考えずに言語を扱える可能性が示唆されますが)。この点に着目し、項構造の発生メカニズムをヒトの認知能力の側面から考えています。言語を操るヒトの能力と言語を扱えない霊長類の能力のストレージの違いを考えることもヒントになるため、フィールドワークなどでニホンザルの認知能力の研究も行っています。同時に、能力の発達と言語の発達は平行線上にあるため、赤ちゃんを対象にした実験も研究対象です。また、逆に言語を扱えない人の認知能力の考慮も言語のための認知能力を探る手助けになります。現在は行っていませんが、そのために失語症患者を対象にした実験も行うことになります。こういった研究は、プログラミングを使ったソフトでの実験の後、統計処理での「意味のある結果か」の確認、コーパスというデータベースとの照合、というプロセスで行われます。

3. 研究を通じて将来成し遂げたいこと（解明したいこと）について教えてください。

振り返ってみると、私の理論言語学研究のルーツは中学生の頃の経験に根ざしているのかもしれない。当時、「受験パンク」った私は文法の存在に疑問を持ちませんでした。ある日、wikipediaの英語版で“…the thing as I saw it.”ような文に遭遇し、しこりを感じました。asが接続詞なら文脈と整合性がとれず、関係詞ならas節が不完全文であるはずだという板挟みの状態です。煮え切らなかった私は、辞書と塾の先生に頼らずに自分で解決しようとしたのですが、最後の1ピースだけこのパズルにはまるのを拒み続けます。自分のロジックだと答えにたどり着けない。ひどく落ち込み、観念して先生に答えを乞うと、予想だにしない答えが返ってきました。asは例外的に、先行詞の代名詞をas節内に伴いながら関係詞の役割を果たすことがある、というのです。文法的ではない、と腹を立てたものですが、さらにショッキングなことに、文法というものは存在しない、とも釘を打たれました。英語という数学を楽しんでいた私からしたら、その事実が腹立たしく、「不完全な言語」に失望しました。

言語の不完全性はどこから来るのか、という問の答えを私は知りたいと思っています。この問は、英語の規則性はどこからくるのか、とも言い換えられます。そう考えると今英語が不完全な産物であるという事実に惹かれているのは皮肉なようで、案外そうではないのかもしれない。メタ的に振り返っても、腹を立てたのはやはり規則的に解決できないことです。「不完全な言語」という認識が生まれたのも事実ですが、「なにかしらの力」に動かされて、持たないはずの「半端な規則性」を持つという事実に目を向けるようになったのも事実です。

どこからその「半端な規則性」は生まれるのでしょうか。「なにかしらの力」とは何でしょうか。この規則を私は便宜的に「構文」という形に置き換えて研究しています。「なにかしらの力」は人間の認知能力（ワーキングメモリや連合など）と使用頻度だと考えています。簡単にいうと、ある構文とある語を組み合わせることでその組み合わせは長期記憶に地位を築くがために容易に取り出され、あまり使われない組み合わせはエピソード記憶から取り出せないため、組み合わせの自然さ（容認のされやすさ、つまり文法性）に差が生まれ、英語は「半端な規則性」を持つようになる、ということです。構築したこの仮説が支持すべきものかどうかを確かめることが当面の目標です。



課外活動ニュース

本学部の学生は、留学などの学業のみにとどまらず、積極的に学内外の課外活動に参加しています。全国の大学生が集う会議で世界が直面する問題について学んだり、サークル活動を通して留学生支援を行ったりと、活動は多岐にわたります。様々な考え方や価値観を持つ人びととの出会いを通して、大学生活を充実させより豊かなものにしていきます。素晴らしい仲間や新しい知識を得た、キラキラ輝く学生たちに、自らが参加した活動について紹介してもらいます。

上田 未来

～ Peace Conference of Youth ～

< Peace Conference of Youth >

執筆者：石沢 瑠

6月からコスモスクエア国際交流センターでの準備が始まり、9月3日（土）にグランフロント大阪で開催された「Peace Conference of Youth」に参加した、英語コース3回生の石沢さんに、そこでの経験、そして学んだことについて聞きました。

PCYって何ですか？

PCY (Peace Conference of Youth) は世界平和実現を目的とし、主体的かつ積極的なアクションを起こすことができるリーダーの育成を目指すプログラムです。本年度PCY2016は飲料水問題に焦点を当て、世界各国の次代を担う学生たちがその問題解決に向け、どのようなアプローチができるかについて考えます。



どうしてこのプログラムに参加しようと思ったのですか？



私がPCY2016に参加した理由とは、世界各国で起きる飲料水問題についての理解を深め、異なる国々の人の意見、価値観を共有し、さらには具体的に、何が私たちにできるのかについて考えてみたいと感じたからです。私がこの問題について興味関心を持ったきっかけは2014年にカンボジアでの貧困層の人びとを対象とした居住建築活動、衛生教育活動のボランティアに従事したことから始まります。実際に現地のインフラ、安全な住居、飲料水設備が完備されていない農村地域を訪れ、

住宅衛生環境の悪さを目の当たりにしました。そして、その隣で無邪気にも泥とごみが混ざりあった雨水を飲料水として飲んでいる少年を見て、衝撃を受けたことは忘れもしません。このように、現在の日本では考えられない環境が、今でも当たり前のように世界中には多く存在するのだと悲慘に感じました。それと同時に、私はこれら様々な問題に関してどれほど無力であるのかを思い知りました。その結果、PCYは現地にはびこる問題をどのように解決できるのかを改めて問い直す機会だと感じ、参加を決心しました。



PCYプログラムではどんな活動をするのですか？

PCYプログラムの運営を行う大阪青年会議所のもと、世界各国から集まる優秀な学生たちと共に、飲料水問題についての理解を深め、今までの知識や経験を踏まえながら、どのようにこの問題解決にアプローチできるか熱い議論を英語で交わします。さらに、そこから得られた意見、情報、理解を基に問題解決プラン（アクションプラン）を全日程8日間で創出します。この過程では、実際に専門家の講演を聞く機会が設けられており、最終発表の場として1000人の前で行うプレゼンが準備されています。

SAわたしのベストショット企画

<クローバー祭>

執筆者：綿引 円香

2016年11月5日（土）・6日（日）に京田辺キャンパスで行われたクローバー祭において、毎年恒例のGC学部主催「SAわたしのベストショット」の企画展示を行いました。



2016年11/5(土)、6(日)の2日間にわたって開催されたクローバー祭で「SAわたしのベストショット」という学部企画を出展しました。これはGC学部の3回生全員参加による企画です。具体的には英語コースと中国語コースの学生は自身の留学中に撮影した写真の中から、また日本語コースの学生は入学後に日本で撮影した写真の中からそれぞれが一番思い出深いと思う写真を1枚選んで展示するというものです。今年は「友達部門」「自然部門」「何これ！？部門」「特別賞」の4部門を設け、来場された方々には約100枚の写真の中から最も印象に残った1枚を選んでいただきました。毎年この企画は盛況ですが、今年も多くの来場者で賑わい、2日間で600人以上の方々に投票していただきました。今回の企画で展示した写真は現在学部の自習室に飾ってあります。



～ JUEMUN ～ “Japan University English Model United Nations”

< JUEMUN >

執筆者：上田 未来

京都外国語大学で2016年6月24～26日に行われた「日本大学模擬国連大会」に参加した、編集者である私、英語コース3回生の上田がそこでの経験、そして学んだことについて書かせていただきました。

JUEMUN ってなに？参加方法は？

英語コース3年では、Advanced Communicative Performance という授業があり、各自5つのクラスから最も興味のあるものを選びます。Calum Adamson 先生が担当するクラスでは、「模擬国連」について学びます。各学生が世界のある国の代表となり、その国の視点から様々な国際問題について考えます。他の国々の代表者と共に議論し交渉しながら解決策を探します。これは実際に国際連合総会で行われていることです。



JUEMUN は Japan University English Model United Nations の略称で、日本語では「日本大学英語模擬国連大会」と訳されています。JUEMUN は、世界中からやってくる大学生・日本在住の留学生・日本人大学生らが集い、活発な議論を交わし合う非常に刺激的な場所です。Calum 先生は大学模擬国連の運営に携わっており、先生のクラスの学生は優先的に JUEMUN に参加することができます。他の ACP クラスを履修していても、希望すれば参加することは可能です。2010年に第1回大会が名古屋で開催された時の参加人数は約50名ほどでした。2016年6月、3日間（24—26日）にわたり開催された第7回目となる今年は京都外国語大学にて行われ、30か国から約340名もの学生が参加しました。そんな今年のテーマは「Quality of Life for ALL」、でした。①難民の子どもたちの保護、②健全な生活と健康の促進、③包括的かつ平等な教育・生涯教育の保証、④都市と居住地の開放、安全性、快活性、持続性の促進、⑤アジア諸国における地震への備え（レゴを使って）という5つの会議の議題があり、各国それぞれ割り振られます。会議はすべて英語で行われます。



事前準備は？どんな活動をするの？

JUEMUN に参加するにあたり最も重要なことは本番までの準備です。まず参加者全員、ポジションペーパーというものを用意します。これは自分が代表を務める国についての基本情報と、与えられたテーマについてその国の現状や課題、解決策のリサーチをまとめたものです。これらの情報に基づいたスピーチも用意します。準備を徹底しておかないと、世界中からやってくる優秀な学生に圧倒されてしまいます。具体的に会議では、地域ごと・抱える問題ご

とのブロックに分かれ情報共有を行い、それをもとに、各グループで特定の問題に対する解決策の提案書の作成に取り組みます。そして会議終盤にはこれらの提案を採用するか否かの投票が行

われます。会議はまさに国連そのもので、緊張感たっぷりでした。3日間という限られた時間の中、グループ内での意見の対立や募る疲労と闘いながら解決策を完成させることは非常にタフでしたが、終わったときは達成感でいっぱいでした。

参加理由は？何を学んだ？

私は Calum 先生の授業を履修していませんでしたが、以前から国連で働くことに興味があり、ぜひ参加したいとの旨を伝え今回参加に至りました。留学中は様々な国の人びとと毎日のように触れ合っていました。帰国後は日々の生活に追われ世界から遠ざかってしまったような気持ちになりました。そんな私にとって JUEMUN は非常に良い刺激になりました。日本で暮らしているとなかなか身近に感じられない問題も、その問題を抱える国の代表となることで、感情移入できました。どうすれば彼らの生活の質を高められるのか、多様なバックグラウンドを持った学生たちと真剣に考え英語で議論し、留学中の日々が戻ってきたような感じがしました。自分がいかに無知だったかを思い知り、世界情勢に常にアンテナを張っておくことの重要性を再認識しました。少しでも興味を持った人はぜひ参加してみてください。日本にいながら留学中のように、海外の学生と交流できる絶好の場です。大学生に限らず、MUN (Model United Nations) というすべての人に開かれた模擬国連もありますので、チェックしてみてください。

GC 学部の学生ってどんなサークルに入っているの？

<サークル> 執筆者：中西 彩乃 (Meahula Nohealani)
山口 真生 (Good Samaritan Club)
平越 真由 (One Voice)
和布浦 里彩 (P.S.)
島田 雄次 (MALT's)

GC 学部生は勉強に留学、様々な活動に参加していてとっても忙しそう…。
サークルに入っている人はいるのかな？学部の活動と両立できるのかな？
…そんな疑問をお持ちの皆さん、GC 学部では、
たくさんの学生が様々なサークルに所属して、個性を発揮しています！



Meahula Nohealani

Meahula Nohealani はフラダンスサークルです。170人で活動してします。練習は火・水曜日に行っています。仲間と共に真剣にフラダンスに打ち込み、スキルを高め合っています。学祭をはじめ、百貨店でのイベントなどの外部発表があります。また、映画『フラガール』の舞台になったハワイアンズでのフラフェスティバルにも参加しています。フラダンスを通してか

けがえのない仲間に出会い、共に成長できるサークルです。Meahula Nohealani で大学生活を充実したものにしませんか？



Good Samaritan Club

Good Samaritan Club は京大・同志社・立命館からなる通訳ボランティアガイドサークルです。初対面の方と1日を共にし、英語で会話をし、京都を案内するのはとても体力のいる仕事ですが、「今度は私たちの国に来てね、ホテルはとらなくていいのよ!」と言ってもらえた時は本当に嬉しいし、やりがいを感じる瞬間です。この活動を通して私は世界中に宿ができました。

One Voice

One Voice は、自分たちの声だけを使って音楽を奏でる「アカペラ」を楽しむ、歌が大好きな100人を越える巨大サークルです。同志社 EVE 祭や学外でのサークル主催ライブにとどまらず、他大学との交流ライブ、さらに自治会の地域イベントやデパートなどの出演依頼を受けることもあり、サークル内のバンドが出演しています。



P.S.

アコースティック系サークル P.S. は、拠点を今出川に置き、約週2回の活動を行っています。メンバーは約60人で、サークル内で毎月ライブを開催しています。優しい先輩方・友人に囲まれ和気藹々としたサークルです。忙しい GC 生活の中でもギターを弾いている時間はすごく癒されます。大好きな先輩や仲間たちと練習できる幸せを感じながら過ごせるのも P.S. のおかげです。

MALT'S

MALT'S は野球サークルで、現在総勢110人で活動しています。野球未経験やルールを知らない学生もたくさんいて、男女比率は1対1です。そんなメンバーも楽しめるよう、スポーツ大会をはじめ、毎月様々なイベントを開催しています。平日の授業後に練習し、春・秋2回開催される学内リーグ戦に参加します。昨年の成績は関西ベスト8と大健闘しました。GC の学生もたくさん所属していて、留学で1年活動に参加できなくても、温かく迎え入れてくれる Family のようなサークルです!



～オープンキャンパスに参加して～

<オープンキャンパス>

オープンキャンパスに参加した1回生の堺さん、岡部さんに、オープンキャンパスに参加して学んだこと、また、当日どのような企画に取り組んだのかについて書いていただきました。

執筆者：レポート① 岡部 和也 ジェームズ

レポート② 堺 遼哉

入学して1か月程経った授業の中で、先輩からオープンキャンパスのスタッフを募集していることを知りました。軽い気持ちで友達と手をあげ、参加することになりましたが、プレゼンテーションをするという大きな役目を任せられました。私自身はオープンキャンパスを実際に見に行ったことがなかったので、その雰囲気あまりわかりませんでした。



最初は「とても固い雰囲気ですっかり取り組んでいかないと。」という思いでいっぱいでした。きっと他の1回生も同じ思いだったと思います。しかし、先輩との仲が深まってゆくにつれ、緊張がほぐれ、以前より楽な気持ちで取り組むことができるようになりました。毎週水曜日の昼休みに、先輩と打ち合わせをしました。計画を練り、話し合い、早い時期からオープンキャンパスに向けての取り組みが始まりました。僕は友達と2人で英語コース1回生の授業紹介のプレゼンテーションをしました。まず去年のプレゼンをもとにベースを作り、そこから少し改良を加え、先輩の前で練習しました。的確なアドバイスをいただき、最終的には去年とは全く違うオリジナルのプレゼンテーションが出来上がりました。GCの自習室で友達と自分たちのプレゼンの動画を撮り、客観的に見て改良を重ねる批評会も行いました。先輩にまた改善したものを披露し、褒めてもらった時はすごく自信がつかしました。オープンキャンパスの本番が近づくにつれ、練習は本格化し、プレゼンメンバーで夜遅くまで大教室で練習しました。本番の大教室を一足先に体験してすごく緊張したのを覚えています。いつもは出来ていたことなのに、何百人もの受験生が目前にいるのを想像するだけで頭が真っ白になりました。何回もステージの上で練習して、やっと慣れることができました。



そして本番当日、いつものように学校へ行くと思議と緊張や不安はありませんでした。何回も何回も2人で練習してきたからでしょうか。ワクワクしかありませんでした。いよいよ自分達のプレゼンテーションの番が回ってきたとき、「やりきるしかない！」と息を合わせてステージに登りました。笑いもしっかり取れ、小さなミスには臨機応変に対応し、今までで一番の出来を披露することができました。プレゼ

ンを終え、大教室から出た瞬間、ものすごい達成感に2人で叫んでしまいました！（笑）オープンキャンパスのメンバーになって何を思い、何を感じたか？まずGCの良さを再認識できました。そしてオープンキャンパスでプレゼンテーションを見に来てくれて、個別相談でキラキラした目で色々なことを熱心に聞きにくる受験生達の憧れの対象として、自分達が立っていることに気づき、GCにいる自分を誇らしく思いました。そして英語コースだけでなく中国語コースや日本語コースにも仲のいい友達ができたとことや、1年後、2年後にこんな人になりたいと思えるような尊敬できる先輩に出会ったことは、自分の中でもとても大きな事でした。オープンキャンパスのメンバーとしてGCの良さを皆さんに伝える事ができ、自分の中でも価値観が変わり、様々な良い結果を残す事ができました。「メンバーになれて本当に良かった！！GC最高！！」

英語コース1回生 岡部 和也 ジェームズ

たくさんの練習と準備を重ねてついに！オープンキャンパス本番の日がやってきました。まず晴れて良かった！（笑）そんないい天気にも恵まれて、いよいよ京田辺キャンパスでの本番です！大学で一番大きい教室が満員になるほどたくさんの方にお越しいただきました。僕は当日にメンバーが着用するポロシャツのデザインを手がけ、その制作担当だったので、本番の日はプレゼンには参加せずに、来ていただいた方の誘導と質問対応をしていました。それでも本番前は僕まで緊張してしまいました。そんな中でもメンバーの皆は毎日たくさん練習してきた成果を発揮し、最高のプレゼンを披露してくれました！

まずは、1回生女子コンビによる学部の紹介です。2人ともこの学部のいいところを元気に発表しました。

次に、一般入試と公募推薦入試について、1回生は自分たちがどんな勉強をしてきたのかを話しながら、受験を控えている高校生に勉強面のアドバイスをしました。実際に成功している人からのアドバイスはとても頼りになったと思います。

そして、次からは3つあるコース別の紹介です。最初は日本語コースの紹介です。なぜ留学して日本語を学ぼうとしたのか、実際にはどのような勉強をしているのかなど、普段あまり知ることのできない、日本に来た留学生が学んでいることを紹介しました。



次の中国語コースの紹介では、中国語コースの日々の授業風景の写真がたくさん準備されていました。そして3回生の先輩が自分の留学体験について話しました。留学中に訪れた中国のいろいろな観光名所や風景、大学での暮らしびりを紹介しました。中国には様々な国から来た留学生がいて、大変刺激的な国であ

り、中国語は今後とても重要な言語になることがよく伝わったと思います。

そして最後に英語コースの紹介です。1回生が来年の Study Abroad に向けて今どんな準備をしているのかを、個性溢れるプレゼンで紹介しました。授業以外に普段の生活風景なども紹介し、英語コースらしさがとてもよくでていたプレゼンでした。そして、3回生の先輩が留学先での生活や勉強内容を紹介しました。GCの学生にいろ



んなアンケートをとり、GCの学生全員の生の声が採用されていて、聞いている私たち1回生もSAがより一層楽しみになるようなプレゼン内容でした。また、3回生がSAから帰って来てから、どのようなことをゼミや授業で学んでいるのかを聞くこともできました。GCでの大まかな学習や、こういった人材教育を目標としているのか、さらにはこのグローバル社会において自分たちGC学部生は何ができるのかということを考えるためのヒントにもなるような素晴らしいプレゼンでした。

京田辺キャンパスでのオープンキャンパスの1週間後には、今出川キャンパスでオープンキャンパスが開催されました。もちろんGCも学部紹介のプレゼンをしました。私たち京田辺キャンパスの学生は、都会に出ていく感じがして、とても新鮮な気持ちでした(笑)。

最初は、やはり人の多さに圧倒されましたが、様々な学部の紹介を見て、待ち時間に練習を行い、メンバーの人と話しているうちにだんだんいつもの雰囲気になり、本番は万全の状態で臨めました。

紹介プレゼンの後には個別ブースで一人ひとりの質問に対応しました。僕はプレゼンには参加していなかったので、来ていただいた高校生やご両親に直接GCについて話したのはこの時でした。高校生たちは全員本当に真剣に僕の話聞き、質問をしてくれたので、僕も真剣に答えました。最後に「ありがとうございました」と言っていたことが何よりも嬉しく、やりがいを感じた瞬間でした。誰かの力になれることの充実感を学びました。

終わってみて思うことは、何かを大人数で作り上げることはとても難しいことですが、その分の達成感も最高なものだという事です。また、僕たち1回生をはじめとしたメンバー全員をまとめ上げ、オープンキャンパスを成功させた先輩方を本当に尊敬しています。素晴らしい人との出会いにあふれたこの学部に入り、オープンキャンパスのメンバーになれたことはとても幸せなことだと実感しています。だからこそ、そんな先輩方のようになりたいという思いが強まりました。また、1期生から今まで受け継がれてきたこのオープンキャンパスを私たちも最高のものにし、さらにそれを後輩たちに引き継いでいきたいです。

最後になりますが、メンバー全員が共有していたのは、「グローバル・コミュニケーション学部という最高に素晴らしい学部を、皆さんに好きになってほしい」という気持ちです。僕たちの大好きなGCを精一杯紹介することは、一番のやりがいだったかもしれません。これからもこの学部が大好きな人が増えて仲間のコミュニティがどんどん広がっていくことが本当に楽しみです！！

英語コース1回生 堺 遼哉

GC発祥サークル

Fountain Commons

Fountain Commons とは?



Fountain Commons

Fountain Commons (FC) は、グローバル・コミュニケーション学部 (GC) の1期生が作った国際時事勉強会サークルです。FC は、「知の泉」という意味で、一人の小さな水滴のような知識も皆の知識が集まれば泉のように湧き出てくるといった想いで名付けられました。

実際どんなことをしているの?

▶ 国際時事の勉強会

毎回メンバーの誰か一人が最近起きているホットなトピックについてプレゼンをします。そのプレゼンが終わったら、そのトピックについてわからないところを質問し、皆でディスカッションを行っています。

▶ 課外活動

留学説明会

留学経験がある GC 学部で FC に所属している上級生が GC1回生に向けてプレゼンをします。

ゼミ説明会

留学から帰ってきた2回生へ、すでにゼミに入っている上級生が説明会を開催します。

就活セミナー

GC 学部の先生でもあり、FC の顧問でもある寺西先生が就活を控える学生に就活で大切なことを教えてください。



毎週火曜日
昼休み
京田辺
キャンパス

FCのポイント

1. 自分が興味のない分野でもどんどん勉強できる。
2. 顧問の寺西先生が毎回プレゼンを評価して、コメントもいただけるので、参加するたびに実りあるものになる。
3. 夏合宿など交流会もあり、先輩・後輩の仲も良い。

一人ひとりが溜めてきた知識を泉の波紋のように広めていく

「楽しい×学ぶ」をモットーに、メンバーの一人ひとりが学んでいます。FCはGCの学生が多く所属していることから、GCのための活動も行っています。

詳細は Facebook、Twitter で

Fountain Commons

検索



共に学び、
共にはしゃぎましょう！
by FC代表 西山雄登さん

あなたも Fountain Commons の仲間になりませんか？

創設者の思い：西川秀平さん、前平亮介さん



こんにちは、Fountain Commons 創設者の西川秀平です。意見を持つこと、議論すること、行動を起こすこと。そして、基盤となる幅広い知識と教養があること。僕が留学中に見てきた「活躍している人」の特徴です。帰国後、同じようなことを感じていたメンバーが集まり、気がいたらサークル立ち上げに向けて皆でミーティングを重ねていました。一人の知識は限られていると痛感します。でも、意見のある人が集まると多様な視点が生まれます。僕たちはそんな場所を「知の泉」、Fountain Commons

と呼んでいます。これから皆さんは、様々な活動に関わる機会があります。少しの勇気をもって、ぜひ一歩踏み出してみてください。そして興味を持ってもらえたなら、ぜひ一緒に知の泉、Fountain Commons を作っていきましょう。

Global Baton For Ishinomaki

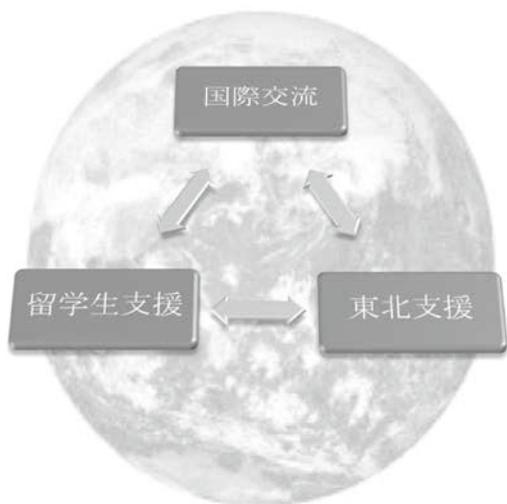
グローバルバトンとは…

**Global
Baton**
For Ishinomaki

グローバルバトンは、「同志社大学内国際交流の場の提供」と、「東日本大震災復興の支援」の二本柱からなる活動を行っています。日本語学習者（留学生）への支援・震災復興の支援を行う事、一見関連性のないこの2つの活動ですが、そこには、先輩方のこんな思いがあります。

以下の図を使ってグローバルバトンができるまでのストーリーを皆さんにご説明します。

始まりは3つのキーワードからだった。



先輩が留学から帰ってきた2014年のキャンパス内で留学生同士が固まり、孤立している光景を目の当たりにしたそうです。そのとき、「どうにかしたい」と思ったことがきっかけでした。しかし、大学内に国際交流サークルはすでに数多くありました。そこで、単なる国際交流ではない、付加価値がある国際交流について考えた結果、「東日本大震災復興の支援」というキーワードに辿り着きました。震災から3年が経過していたその当時、人々の記憶から震災が消えていっているのではないかという危機感を感じたことが理由です。自分にも、留学生にも、そして社会にも利益になるように、私たちや世界中の皆さんと「バトンを繋げていく。」こういった思いから、今の Global Baton For Ishinomaki があります。

現在の Global Baton For Ishinmaki は…

- ▶メンバー：約30人
- ▶イベント：月1回
- ▶ミーティング：週1回

Twitter, Facebook で検索！

Global Baton For Ishinomaki



実際にどんなイベントをして寄付金を集めているの？



料理パーティーや言語レッスンなどを開いています。言語レッスンを例に挙げてみると、英語を学びたい人と日本語を学びたい人をマッチングさせて、40分間1対1で互いの言語を教え合いながら会話をします。その参加費である311円を被災した地域へ寄付します。

これからもバトンは続いていきます！

創設者の思い：沼田彩さん、石田和也さん



こんにちは。沼田 彩と石田和也と申します。私たちは留学から帰国し、日本でたくさんの留学生同士が固まってしまっているのを目の当たりにして「なんとかできないかな」と思ったこと、また「国際交流と被災地復興を後押しする場を作りたい」という思いが合致して設立に至りました。単なる国際交流ならば、既に存在しているサークルが沢山ある。ならば自分たちは国際交流から付加価値を生み出して、誰かの支援が出来るはず…。そこで出てきたキーワードは3つ→国際交流、東北支援、イベントでした。

このサイクルを私たちや世界中の皆さんが駆け巡りバトンを繋げていくこと、それがグローバルバトンです。ただ、この変化の激しい時代、創設者の思いや今のグローバルバトンの運営方法に固執することなく、グローバルバトンのあり方を柔軟に変えていっていただきたいという思いがあります。今もまだバトンが繋がっていることが嬉しくてなりません。挑戦の選択肢の一つとして、グローバルバトンを是非やってみてください。

LUCKY とは?

学生団体



LUCKYは国際ボランティアサークルで、現在はネパールに小学校を建てるという目標に向けて活動を行っています。募金活動で集めた資金はNPO法人ISSC様を通して学校建設費に充てられています。学生である自分たちにとって一番身近なものとは何か、と考えメンバー同士で一致した意見が「教育」でした。特に「初期教育」はその後の人生を大きく左右する重要なものなので、「子どもの教育支援」を軸に活動することになりました。現在、メンバーが年に2回、ネパールの支援校の視察に行って現地で本当に求められている支援は何なのかを考えるスタディツアーも行っています。

実際にどんな活動をしているの?



▶ 2016年夏スタディツアーでネパールを訪れた際、メンバーの手形で“LUCKY”と描かれた旗を支援校の子どもたちにプレゼントしました。



▶ 毎週土曜日、京都タワー前にて募金活動を行っています。

LUCKY について



- ▶ 現メンバー数…99人（他学部、他大学生多数在籍）
- ▶ 活動頻度…月に1回全体ミーティングを行い、活動の現状や課題、目標について話し合います。
- ▶ 活動内容…毎週土曜日、京都タワー前で募金活動を行っています。
- ▶ 創立…2012年 GC 学部英語コース2期生によって創設されました。

～ Learn to Act, Act to Learn ～ あなたと明日を。

0から始めたボランティア活動。自分たちに何ができるのか探し、学びながら進んできました。逆に進むことで学べることもありました。これからも、自分たちが思うこと、やりたいことに向かって進んでいきます。「LUCKY メンバー」「活動を支えてくれている人」「支援を求めている人」これからもそんな「あなた」と共に明日を創っていきます。



創設者の思い：菅勇輝さん



皆さん、こんにちは。学生団体 LUCKY の創設者兼副代表の菅勇輝です。僕は大学1回生の時（2012年4月）に、この学生団体 LUCKY を立ち上げました。何か一つ大きいことを成し遂げるため、ネパールでの1年を含めた今に至るまでの5年間の大学生活の時間、努力の全てを LUCKY に費やしてきました。地図のないところから、道のないところから、0から始めた活動。毎日が新しいことの繰り返しで、今のラムジャコット村の学校を支援するまでに出会いと別れを繰り返して、たくさんの遠回りをしたし、たくさんの壁を乗り越えてきました。4人（創設者）で始めた小さな

会話 - 世界を変えてみたくない？ - その小さな会話が今の奇跡の全てを作りました。支援先のラムジャコット村の方々、協力して下さっているの方々、今まで LUCKY に携わったメンバー、現役で頑張っている LUCKY のメンバー、そしてこれから入る未来の LUCKY のメンバー。この全ての思いを絶対に僕は創設者として今後も裏切りません。と同時に、これからの LUCKY が100年以上続くサークルになるように全力で応援し続けたいと願います。

留学先からの声

GC 学部の最大の特徴といえば、1年間の Study Abroad です。英語コースの場合は2回生の春学期から秋学期にかけて、中国語コースの場合は2回生の秋学期から3回生の春学期にかけて、それぞれ留学を経験します。

本企画では、留学中の学生が現地から生の声を届けてくれます！留学先の大学の授業についてはもちろん、ホームステイなどの日常生活や休暇中の旅行についても書かれています。

それでは、世界中の留学先大学からの報告をお楽しみください。

浅野 潤

英語コース留学体験記

江崎 航平 イギリス：University of Southampton



はじめまして、GC 学部2回生サウサンプトン大学（英国）留学中の江崎航平です。我々2回生は学部のカリキュラム上、未だに1回生の皆さんと顔もあわせていないというやや悲しい思いではありますが、皆さんそれぞれ来年からの留学先に胸を弾ませていらっしゃると思います。

イギリスは南東部の町サウサンプトン（Southampton）にある University of Southampton の学生として今年の2月末に日本を旅立ち、早いもので留学9か月目に突入しようとしています。今回経験談執筆の機会をいただきまして大変うれしい気持ちと同時に、「留学経験談」と聞くといかにも既に長期にわたる留学を終え、英国での豊富な経験と知識を持っているかのように思われるかもしれませんが、僕は留学のまさに真っ最中です。それにも関わらず留学体験談を綴る複雑な気持ちと、「もう留学が終わっちゃうんだあ、..。」というさみしい気持ちを胸に秘めながら、自分が2月から滞在している学生寮の一室で、夜中にパソコンを前に考えをあれこれ巡らせている次第です。（実際に日本出国当日に関西国際空港にて同志社2回生サウサンプトン組で撮影した写真を見ると「あれ？これつい先週のことじゃん」と本当に思うほどです。）

今回この体験記が GC の学生の皆さんをはじめ、これから大学受験に臨まれる高校生の皆さまと保護者の皆さまを读者として想定しているということで、留学8か月目における僕の「イギリス留学」に対する見解や実際の生活の側面などをふまえ、一般的にイギリス留学を考えている方が気になっていたり疑問に思っているポイントを簡単に述べたいと思います。

まず僕が GC がもつ数ある留学先の中からイギリス、そしてサウサンプトンを自分の SA（Study Abroad）先として志した動機からお話しさせていただきます。やはり英語圏留学というアメリカやカナダなどが先行するようで、昨年、1回生時にお世話になった学生寮の寮母さんに「江崎くん、なんでアメリカじゃなくてイギリスなの？」と疑問を抱かれたり、また高校時代の友人らが送別会を催してくれた際、「そういえば留学先はどこだっけ？イギリスっ！？ご飯まずいらしいじゃん。」と素晴らしい「はなむけ」の言葉をもらったりと、それは様々でした。そんな中、僕をイギ

リス留学にひきつけたきっかけは、高校時代の「イギリス英語との出会い」でした。高校時代、国際系のコースに在籍していたこともあってTOEIC®を受験する機会が頻繁にあり、そのリスニング対策として数ある英語の訛り（アメリカ英語、オーストラリア英語など）に触れ、そこで初めて英語にもたくさん種類があるのだと気づきました。そのなかである日、興味本位で視聴したYouTube上の動画に登場したイギリス人の政治家の英語を耳にしたその瞬間から、そのイギリス英語の虜になりました。ここでイギリス英語一つをとっても無数に種類があり、そのバラエティーは大国アメリカよりも多いと言われていたほどで、実際に一つ隣町にいくと人びとが違うアクセントで話すほどです。その中でも僕はBBC（英国放送協会）のアナウンサーや英国政治家、オックスフォード大学やケンブリッジ大学などを卒業した人たちが話す容認発音、RP（Received Pronunciation）に惹かれて、高校2年あたりから英国1年留学を夢見ることとなります。そして昨年春、同志社大学グローバル・コミュニケーション学部に入學し、2年次の1年留学が学部の必須カリキュラムだったことから、それまで夢だったイギリス留学が少しずつ実現にむけて動き出しました。もう一つのイギリス留学先であるサセックス大学より滞在期間が長いことなどからサウサンプトン大学を志望、そして無事IELTS for UKVIの1年ビザ取得基準スコアをクリアし2016年の2月20日に念願の英国の地に降り立ったわけです。

まずはじめにイギリス英語の存在は僕のみならず、他のメンバーも同様とりわけ大きく感じました。イギリス英語特有のテキパキとし、シャープにそしてエレガントに響くそのアクセントはなんとメロウでかっこいいです。ですが、イギリス人（イングランド人）の国民性やキャラクターについて端的に述べると、「日本人気質から優しさをとった感じ」。もちろん人にもよるのですが、やはり日本人同様「島国根性」で、比較的個人がグループを形成し、他のグループとの交わりにあまり積極的ではなく（特にアジア人に対しては？）、また白人は白人同士、黒人は黒人同士、アジア人はアジア人同士など、割合同じ人種でコミュニティを形成し、生活を送っているように感じます。僕は逆にこれを「イギリス留学における醍醐味」としてイギリス人の友達作りの難しさを楽しんでいます（苦笑）。自分でもある程度社交性があると自負していましたが、また留学前に大学の先生や周りの人から「航平は海外でも大丈夫だ」とおだてられていただけに、正直ここまで友達作りに苦労するとは思っていませんでした。ですので、友達作りの点においては、部屋のタイプを完全なる個人部屋ではなく、先輩のアドバイスどおりシェアルームを選択しておいて本当によかったと思っています。これから留学を考えている皆さんにも学生寮、そしてシェアルームの選択を僕から強くおすすめします。

また先にも述べました「イギリスのご飯事情」についてですが、結論から述べると「誰がまずいと言いはじめたんだ？」という感想です。日本人にとって日本食と比較をすれば劣るでしょうが、イギリス料理自体は思っていたほどまずくはなく、むしろ個人的には美味しいと思うことがよくあるので、よっぽど皆さんがグルメで無いかぎりはその心配する必要もないのかなと思います。

2月から6月までの留学生対象アカデミック、6月から9月までのプレセッションと呼ばれる英語4技能（読む・書く・話す・聞く）集中講座（語学学校的要素）を経て、現在、現地のイギリス人に混じって正規のアカデミック科目を履修して講



義に臨み、また大学の体育会テニス部に所属し日々練習に打ち込むなど、自分なりの日々を送っています。残りのイギリスでの数か月、悔いなく過ごせるようお願いとともに、今回の経験談執筆をきっかけに、イギリス留学をあこがれていた日々や実現に向けて尽力してきた記憶がよみがえり、だんだんと「当たり前化」してきたイギリスでの貴重な生活に対して改めて身が引き締まる思いです。

最後になりますが治安も悪くはなく、やはりなんといってもイギリスの街並み、英語は他の留学先にはないまさに The Britishness な歴史的で伝統・しきたりを感じる素晴らしいものです。他とはちょっと違った唯一のヨーロッパ・英語圏の国 ～イギリス～、あなたも是非体験してみては？

湯浅 大輝 アメリカ：Arizona State University



真夏には摂氏40度を優に超える砂漠地帯、アリゾナが誇る全米随一のマンモス大学、アリゾナ州立大学に僕は留学しています。現在アメリカにきて8か月経ち、留学生活も残り2か月を切ろうとしています。お陰様でここまでの留学生活はとても充実しており、帰国日が迫る度に帰りたくないという気持ちと、1日1日をもっと大切にしようという気持ちで一杯です。本当“Time Flies”ですね。

僕の住むアリゾナ州テンピは大学を中心に成り立っており、バスやライトレールといった公共交通機関が充実しています。僕を含む多くの留学生は大学管轄下にある寮やアパートでルームシェアをしています。決して安いとは言えませんが多くの得難い経験をする事が出来ます。何よりとても楽しいです。もちろん、ホームステイをしている学生もたくさんいます。

留学生活は3月から7月まで語学学校、1か月半程の休みを挟んで8月から12月まで現地の学生やたくさんの留学生と混じってアカデミックの授業を受講するという流れです。語学学校の授業では主に英語の4技能を学び、アカデミックへの準備をします。授業では能動的な姿勢を求められる事が多く、自分で考え、それを意見として発信する事が前提とされます。最初の頃は今まで日本での教育しか受けてこなかった僕は、どんどん質問し意見を言いたいときに言う、日本的な発想でいえば「空気の読めない」他の学生達に圧倒されていましたが、徐々にではありますが、自分の頭で考え、それを臆することなく発言できるようになってきました。語学学校でのプレゼンやディスカッションは比較的浅いところでの議論（英語力のため）でしたが、アカデミックではそうはいきません。何しろ彼ら、彼女達は英語が母国語というだけでなく、議論することに関しては幼い頃から show & tell などを通して表現力を養ってきた能力があるので、ズバ抜けていると感じます。多くの学生はそれ自体を楽しんでいるかのように、自分というフィルターから見た世界を嬉々として語ります。海外の学生と英語で堂々と議論し、渡り合っていくには、まだまだ僕は様々な部分で力不足であると痛感します。

僕の留学生活を支えてきているものは出会いです。本当に様々な素晴らしい出会いがこれまで数多くありました。語学学校では、多くの留学生と仲良くなり、その内のいつも仲良くしている韓国人とはフロリダに旅行に行ったりパーティーを主催したりしました。今でも大切な思い出で

す。夏休みには人生で初めてニューヨークに一人旅に行き、そこで泊まったゲストハウスでは、文字通り世界各国から集まった旅人やビジネスマンと夜通し語り合いました。アカデミックの授業が始まってからは、ルームメイトになったルワンダ人とロードトリップに出かけたり、料理を一緒に作ったり、僕の知らないアフリカの過去や現在を教えてくださいました。つい3週間前もパーティーで知り合った留学生10人程でサンディエゴに行くなど、数え出したらたらキリがありません。「多様性」「グローバル」というようなコンセプトは、実際に経験してみても初めて分かることかもしれないと感じます。また、異なる価値観、文化と出会うたびに、世界はとんでもなく複雑で広い場所だと改めて思います。他者との関わり合いのなかで、自分とは何だろうと毎日考えます。留学の醍醐味ですね。



最後に、留学が出来ているのもひとえに家族、友達や先生方の多大なるサポートがあってこそです。特に家族にはいつも迷惑ばかりかけているので、この場をおかりして感謝申し上げます。この10か月で得たものを生かして、帰国してからも更に成長していきたいと思います。最後まで読んでいただきありがとうございました。

ウルフ彩七まゆり オーストラリア : University of Newcastle



私は今、オーストラリアの大都市、シドニーから車で約2時間ほど南のニューカッスルにあるニューカッスル大学に留学しています。街には自然があふれており、特にビーチは私がオーストラリアで見たビーチの中でもトップクラスの美しさです。そのためニューカッスルの人びとは年中体を動かし、エクササイズに励んでいるので、オーストラリアが肥満大国であるということを忘れてしまいそうです。

私の通っているニューカッスル大学はそんな自然豊かな街にある自然豊かなキャンパスです。登校初日は広すぎるキャンパスに皆戸惑い、しばらくはキャンパス内で迷子になることが当たり前の生活を送っていました。今でも Lost on campus という学校専用の建物検索アプリを使わなければいけない時もあるほどです。

留学当初、私が通っていた語学学校はそんな広い大学のキャンパスの中に併設されているため、留学初日から現地の大学生のライフスタイルを垣間見ることができました。語学学校内の国籍の割合は、中国人が一番多く、続いてサウジアラビア人、インド人、日本人、韓国人といった感じですが、日本人の学生は短期留学が多いのですが、その他の国籍の人はこちらで大学を卒業する人が多いので、彼らの勉強に対する姿勢や将来についての考え方などを聞かせてもらうたびに、大変興味深く感じました。

語学学校では listening, reading, writing, speaking の4技能を鍛えていきます。毎日9時から3時まで、休憩を除いて5時間、クラスメイトたちと一緒に勉強します。正直に言うと、とくに大

変な思いをすることはなく、基礎からきっちりやり直すためには非常に良いプログラムだったと思います。

大学に入学してからの生活はそれとは一変して大変です。オーストラリアには色々な国籍の人が暮らしていますが、ニューカッスルはオーストラリア人の割合が高い地域なので、クラスメイトはほとんど英語のネイティブスピーカー。大学初日の最初の授業でのディスカッションでは泣きそうになった事を今でもよく覚えています。そこで凹んでいたら留学の意味がないので、必死についていこうと頑張っていますが、留学9か月目の今でもなかなか大変です。

オーストラリアの英語は訛りが強いという印象をお持ちかもしれませんが、多くの人はそこまで訛りは強くありません。お年寄りの方や地方出身の方は確かに何を言っているか聞き取れないほどの訛りをしていますが、半年ほどするとだいぶ慣れてきて何を言っているかは分かるくらいになります。非常に強い訛りなので逆に影響を受ける心配はほとんどないと思います。ただ、訛りとはまた別に、オーストラリアにはこの国特有の言い回しや単語が多いと思います。例えば、this arvo というのは今日の午後という意味ですし、マクドナルドのことは「マックス」と言います。中でも特に私が気に入っているのは no worries という言い回しです。これは日本語の大丈夫という言葉と全く同じ意味で使われています。なにかあったらとりあえず no worries! これで皆ハッピーになれます。

この留学中色々な所に旅行をしましたが、私は主に東海岸沿いの都市を旅行しました。というのも、オーストラリアの東海岸にあるシドニーから西海岸にあるパースまでは飛行機で5時間もかかり、時差は3時間もあります。大学に通いながらオーストラリア中を巡るのはなかなか困難なのです。また、内陸は砂漠地帯で観光地と言えばウルルくらいしかないので、旅行をして回るのは主に海岸沿いの都市に限られます。

実際、オーストラリアを見て回って感じたことは、この国一つで色々な国を巡った気分（あくまでも気分）になれるという事です。というのも、北は熱帯雨林から中間の砂漠地帯、南の草原地帯といった風に北から南、東から西まで様々な気候が一国の中にあり、どこを訪れても素晴らしい景色を見ることが出来るからです。また、かつてイギリスの植民地だったため、イギリスの建築様式がいたるところに残っており、どこの町並みも大変綺麗です。

最後になりますが、オーストラリアに来て何が一番良かったかという、やっぱり気候です。「そんなことかい!」と思われるかもしれませんが、個人的には一番大事なポイントです。気候がいいので皆で遊びに行く時は外で遊ぶことが多いですし、気候がいいのでイライラしている人を見るのも少ない気がします。また、何か悩み事があっても、晴れ空の下で日向ぼっこをしていると気分が良くなります。オーストラリア人がのんびりしているのはこれが大きな理由ではないかと思うほどです。留学という目的は見失ってはいませんが、のんびりと、たまにはワイワイと、今までの私の人生の中で、「今が一番楽しい!」と言っても過言ではないくらい、楽しくて充実した留学生生活を過ごしています。





Victoria University of Wellington はニュージーランドの首都であり、政治経済の中心であるウェリントンに位置する大学です。首都ですが小さい町なので、移動が楽です。南半球では日本とは季節が逆になるため、日本に居ると経験できないコートを着る7月、8月や、真夏にあるクリスマスなどが経験できて、勉強以外にも楽しみがたくさんあります。多国籍国家なので疎外感を感じませんし、皆優しいので英語が下手でも話すことをためらわなくてもよく、英語のレベルが上がります。

3月から5月の末まで EPP という大学付属の言語コースで speaking, listening, writing, reading の4技能だけでなく、外国の教育特有の critical thinking に慣れる練習もします。クラス分けテストでクラスが決まるので、自分と似たレベルの仲間と切磋琢磨しながら英語のレベルを上げることが出来ます。クラスごとにどのスキルに重点を置いて学習を進めるかは異なります。しかし LLC という留学生専用の図書館で自分がブラッシュアップしたいスキルを自主的に勉強することも出来ますし、先生に頼むと色々な教材や+αの課題を出してくれます。

EPP の終了判定テストで本科に進めるかどうか決まります。終了判定テストで必要な点数をとることが出来ると、7月から本科生として勉強することが出来ます。Victoria University には様々な専攻があり、私は歴史や文化に興味があったので、留学先の15校中 Victoria University でしか学ぶことが出来ないニュージーランドの歴史やマオリ文化、マオリ語を専攻しました。全く知識がない状態からだったので、大変でしたが自分の知らない文化や新しい言語を学ぶことが出来てすごく幸せでした。

留学を通して一番痛感し悔しく感じたことは、自分がいかに母国のことを知らなかったかです。本科のコースは大講義室でのレクチャーと週1回ある少人数でのチュートリアルで構成されています。レクチャーは日本の大学での講義と同じで、チュートリアルはその週学んだ内容の復習やその内容について自分がどう思うかをチューターやクラスメイトと一緒に話し合っていきます。私は歴史と文化のコースをとっていたのですが、必ず「じゃあ日本はどうなの？」や「日本で似てる出来事あったりした？」と聞かれました。政治についてのディスカッションをしたときは「日本の政治ってどうなの？日本特有のこととかある？」と聞かれ、チュートリアル以外でも友達と話していると日本のことを聞かれる機会が多かったです。その都度、自分がいかに自分の国のことを知らないのかを痛感しました。外国の文化や歴史は興味があったのですが、自分の国となると、特別感が無く、「いつでも学べるか」と思い、全く勉強していなかったのです。そのせいで歴史も文化も政治のことも誰もが知っている知識しか無かったのです。例えば「なんで日本人はお礼を言うべき時も「すみません」というの？」などの質問に対して答えが出てこないなどの経験が多々ありました。私は学部のカリキュラム上、留学をする機会がありましたが、国によっては留学はトップの人達しか経験できないところもあります。現に EPP を受けていた時にマンマーの Young Leaders や、国から奨学金をもらって国を代表して勉強をしに来ている人達が居ました。その人達にとっては自分はその国の「代表」で、自分の国のことぐらい分かっていて当然と考えています。中には自分の国の文化を広めようと思って来ている人もいます。私は「留学 = その国の文化や言語を吸収する」という考えしかなかったので、自分の国の事情をそこまで奥深く知る必要性を感じていませんでした。外国のことを知るにはまず自国のことを知っていないと、新しいことを学

んでも深く考えずに「ああ、そうなんだ」で終わってしまうことに気づきました。外国のことを学ぶのと同じぐらいに自国のことを学ぶことも大切だと勉強になりました。たとえ自分はその気がなくても、他人は自分のことをその国の代表として見ている人もいます。たとえ自分が外国のことを学ぶつもりでも、その過程には「自分の国の文化との比較」をする時が来ます。自国のことを知らなくていい理由は無いということを留学中に痛感しました。



鉄羽 永梨 カナダ：University of Winnipeg



私は2月下旬にカナダのマニトバ州にあるウィニペグ大学にやってきました。冬季オリンピックが開催されたり、オーロラを觀賞しに観光客が訪れたり、「カナダは寒い」という漠然としたイメージがあったのですが、具体的には想像がつかず、 -25°C （体感気温 -30°C ）を実際に体験したときは寒すぎてはや「痛い」と感じました。

もちろん、経験したのは寒さだけでなく、留学初日からカルチャーショックにも直面しました。ホストマザーに「晩御飯はチャーハンかマクドナルドかどっちが良い？」と聞かれ、マクドナルドが良いけど、なんだか図々しいなと思って「あなたの都合の良い方で。」と答えました。すると、「私はどっちでも良いから聞いているの。好きな方を選んで。」と返されました。日本で生まれ育った私にとっては、いたって自然な受け答えだったと思うのですが、はっきりと伝えることが重要視される国では、私の曖昧な返答は良くなかったと反省しました。

このように、反省から始まった留学生活ですが、カナダの好きなところはたくさんあります。1つ目は、自然が広大で美しいところです。休暇中に、アルバータ州のバンフとブリティッシュコロンビア州のバンクーバーを旅行しました。バンフ国立公園のエメラルドグリーンやターコイズブルーに輝く湖に魅了され、空に向かってそびえ立つロッキー山脈の雄大さに圧倒されました。また、バンクーバーは都会のイメージに反して自然も豊かで、観光地として有名なキャピラノ吊り橋は緑が生い茂る森の中にあります。北米の雄大な自然は心と体を解き放ち、感動と希望を与えてくれます。そしてカナダの好きなところの2つ目は、たくさんの移民がいて、様々な文化が共存していて面白いことです。私のホストファミリーはトリニダード・トバゴという国から1代前に移り住んだ人たちで、食事や行事はその国の色がとても出ていて、興味深いです。また、街を歩いている人も、伝統衣装を身にまとっている人、宗教的な意味合いを持った装いをしている人をよく見かけますし、公用語の英語とフランス語以外の言語で会話している人もたくさんいます。モザイク国家と呼ばれ、多文化主義が尊重されるカナダでは、多くの文化に一度で触れることができるため新しい発見が多く、様々な国出身の友達と過ごす毎日はとても楽しいです。

しかし、楽しいことばかりするわけにはいけないので、留学の一番の目的である学業にも励みました。留学生活を通して、教育におけるカナダと日本の違いをいくつか感じました。まず、大

学に通っている学生の年齢の幅がとても広いです。働きながら学位取得を目指している人や子育てをしながら大学に通う人、退職してからも自分の知識を深めるために学ぼうとする人が、高校を卒業したばかりの学生と一緒に同じ教室で勉強しています。日本ではあまり見慣れない光景だと思います。それだけでなく、日本の暗記する学習スタイルとは異なり、得た知識をもとに考えてそのアイデアを表現するというスタイルでカナダの大学の授業は進みます。受験のために知識を詰め込む学習をしてきた私たちにとって、知識を得て、そこから自分の考えを持つというのは難しいです。なぜなら、受け身で授業を受けるのではなく、批判的思考を持って能動的に授業に参加しなければならないからです。

また、アイデアを表現する方法もエッセイとは限らず、グループディスカッションやプレゼンテーションだったりします。ディスカッションでは、他の学生の発言に相槌を打つだけでなく、自分の意見をしっかりと持って、それをグループのメンバーに発信しなければいけません。日本の学校では授業でディスカッションをする機会があまりないので慣れていないですし、何より外国語で行うのでハードルが高く感じます。しかし、それもやはり留学をしないとできない経験ですし、経験することで自分自身をレベルアップさせることができますと思います。

日本と違うところに戸惑うこともありますが、世界にはいろいろな人がいて、皆それぞれの文化があるのだということに改めて気づきました。私にとってカナダで留学した10か月は人生の中でも大切な10か月になると思います。留学生活を通して学んだことを活かして、これからの大学生活も頑張っていきます！



渡辺 将也 中国：北京大学



「留学どこ行ってきたの？」と聞かれて「北京！」と答えると、「変わってるね。」「意外。」などと返ってくるのが頻繁にあります。やはり「留学」と聞くと英語圏を思い浮かべる人が多いと思います。実を言うと留学する前の自分もその内の一人だったといえるでしょう。これは度々報道される「中国」という国のイメージによるものなのか、先代の方々が欧米の先進国で学び日本の近代化を担ってきた歴史の名残なのかわかりませんが、北京に留学した身として強く言えるのは「北京での経験は財産になった」ということであり、留学先として中国を選ぶメリットは大きいと考えます。

それを以下の説明で感じていただけると光栄です。

私たち中国語コース4期生の北京組は、戦後70年軍事パレードが天安門広場で行われた翌日の9月4日に首都空港に降り立ち、そこからおよそ10か月間の留学生活が始まりました。70年の節目で国民感情が扇動されている中、留学前のガイダンスで安全管理が何度も叫ばれ、渡航前の不安が大きかったのは事実です。しかし、そこからの10か月で自分の身に危険を感じたことはありませんでした。確かにまったく反日感情を感じなかったとは言いません。「一家揃って日本の製品を買わない」という方がいたり、「首相の靖国参拝問題」を振られたこともありました。そのような感情を抱く人でも、私を日本人という色眼鏡で見避けてたり嫌うのではなく、一人の人間として優しく親切に接してくれて、一緒にご飯を食べたり、お酒を飲んだりする関係を築くことができました。そこからは温かみのある人間性が垣間見えました。私は留学生活を通して、中国人の温かさや親切さの溢れる人間性に惹かれました。

隣には共に国内ナンバー1、2を競う清華大学があり、他にも様々な大学がキャンパスを置く学生街の一角に北京大学は位置します。日本は先進国の中でもトップレベルの識字率を誇っているように、日本では底上げ教育に重きを置き、落ちこぼれを作らないようなシステムで義務教育が行われていますが、中国では日本とは異なる義務教育が行われているようです。仲良くなったある一人の現地学生は小学校、中学校ではトップに合わせた教育がなされてきたと言い、落ちこぼれてしまった人もたくさんいたと話してくれました。しかし裏を返すと、中国にはエリートや天才を生みやすい土壌があるとも言えます。そのような超学歴社会ともいえる環境下で切磋琢磨し、トップレベルの学力を有する学生が北京大学に集まるため、彼らの学習への意識や態度、知的好奇心には畏怖の念さえ抱きました。彼らは外国への関心や意識を強く持っていて、私たち留学生とも積極的に話してくれます。しかし「日本伝統文化のこれってどういうもの？」とか、「日本のこういうところってどう思う？」などのような質問が飛んでくると、自分がいかに自国に対する理解が浅いか、彼らの対外意識が強いかということの思い知らされ、恥ずかしい気持ちになりました。

語学力の向上を主な目的として私たちは留学に行くので、学業に励むことは当たり前ですが、それ以外に留学生生活を充実させる要素もたくさんあります。放課後や休日には北京を観光する、留学生の友達や現地の友達とご飯に行く、スポーツをするなど、様々な過ごし方があります。北京大学の部活動に入っている人がいたり、日本人の社会人スポーツチームに入っている人がいたりしました。長い休みに入ると旅行に行く人が多く、私も合わせて10都市ほど行きました。ただ、

北京で生活するうえで心配要素もあります。気候の面では北京の冬は寒く、PM2.5が立ちこめる日もあり、健康管理や防寒・防塵対策を行いました。近くには日本語の話せるスタッフが常駐している病院があるので、特に大きな問題はなく暮らすことができました。安全面では、危ないと思うことはなく治安は悪くないと感じましたが、携帯電話などの盗難被害は聞いていたので、日本にいる時より神経を尖らせていました。

漢字に慣れ親しむ日本人は最初、話す能力と聞く能力に苦労する人がほとんどかと思います。私も例に漏れず、特に中国人の話すスピードについていけない事が多々あり、理解するのに苦労しました。授業では1クラス10~15人の少人数制を敷き、20クラス以上にレベル分けされているので、自分に合った難易度で授業を受けられます。形態としては中国語のテキストを中国語で学ぶ授業スタイルで、ディスカッションやプレゼンテーションをしたり、グループワークでの課題もあったりして、クラスメートとの交流を図りやすく、実際に仲良くなった留学生の友達と遊んだり、クラス会が開かれたりといったこともありました。日本でよくある聞く側と話す側がはっきり分かれた形態ではなく、自由に発言したり、話し合ったりと、やや欧米的な授業形態をとり、欧米人の発言に圧倒されることもしばしばでしたが、この双方向的な授業に自然と順応していきました。また、授業以外にはランゲージパートナーと話す機会が設けられていました。北京大学では日本語を勉強している学生が思いのほか多くいて、簡単にランゲージパートナーを見つけることができ、この機会を利用して会話をしました。帰国間際には現地の人と話していることも大概理解できるようになり、語学力の向上を感じて、嬉しかったです。

私は何気ない普段の生活から得られる経験にこそ留学する意義を感じました。本能的に生きる中国人の中で揉まれることで、環境への適応力が身につき、異国でもやっていけるという自信にも繋がりました。また日本には会えない人と会うことで、新たな価値観や視点を得ることができ、自分の意識にも変化が現れました。「得るものなかつた留学」といった話はなかなか聞きません。是非ともこの学部で北京に留学してみませんか？





私は、中国・上海の復旦大学に留学していました。元々英語が好きで、多くの外国人が集まるイメージのあった上海を留学先を選びました。また、「大都市」というイメージもあり、生活するのに困らなさそうだったのも理由の一つです。

実際私が感じた上海という街について少し紹介したいと思います。私が抱いていたイメージ通り、大都市でした。超高層ビル、デパートが立ち並び、車や人の往来も激しいです。茶館や小さな露店があり、これぞ中国！といった場所もあれば、おしゃれなカフェやレンガ造りの建物が立ち並び、まるでヨーロッパにきたような気分になれる場所もあります。「中国」と「西洋」、2つの文化の融合が感じられる街でした。

中国に行ったばかりの頃、特に最初の1週間は苦労しました。大学から中国語を学び始め、留学までの1年半、自分なりに真面目に勉強してきたつもりでした。しかし最初は、聞き取れない、話せない、通じない……の毎日が挫折の連続でした。授業が始まってからも同じです。先生の話している内容が所々しか聞き取れず、宿題の内容すらわからない日々が続きました。しかし、授業中は中国語が皆の共通語になります。だんだんと耳も慣れ始め、中国語で様々なことを表現できるようになってくると、毎日がこれまで以上に楽しく充実するようになりました。

私が留学中に大切にしていたことは、なんでも挑戦するということです。現地の大学生と交流がしたくて、自分で復旦大学のサークルを探して参加しました。また、上海に住む日本人のボランティア団体にも所属していました。日本人、中国人、台湾人、アメリカ人などいろんな国籍の学生が集まる学生団体に参加して、国際交流イベントの企画・運営もしました。日中交流会にも積極的に参加しました。

初めは自分の思っていることを半分も伝えることができず、歯がゆい思いばかりしていましたが、だんだんと支障なく意思疎通が図れるようになり、中国語で日本の俳優やジャニーズの話、恋バナまでできたことで自分の語学力の向上を実感しました。そして、日本の友達と同じように話せたことが本当に嬉しかったです。

また、中国ならではの経験というと、「日中友好成人式」に参加したことです。その名の通り、日本人と中国人の新成人のための式です。私は浴衣を着て参加しました。振袖や袴の貸し出しもあり、中国で日本の文化を味わうことが出来ました。中国で成人式に参加するという経験は、ちょうど20歳の年に留学していたからこそ出来たことであり、非常に貴重な経験でした。

皆さん、中国にどのようなイメージを抱いているでしょうか？ マナーが悪い？ 自己主張が強い？ 空気が汚い？ おそらくさほど良いイメージを抱いていない人が多いと思います。私も留学するまでは同じようなことを思っていました。しかし、それが実際に中国に行ってみて180度変わったといっても過言ではありません。中国人のなかには、親切な人がたくさんいます。屋台のおじさん、おばさんは、気さくに話しかけてくれます。それだけではなく、バスや地下鉄に乗っている時、隣の知らない中国人が話しかけてきて、仲良くなったこともあります。電車でお年寄りに席を譲る光景は、日本よりもよく見かけました。そして、日本の文化（アニメや漫画）が好きな中国人も多いです。日本人の私よりも日本の地理や歴史に詳しい中国人がたくさんいて、驚きました。

食事の衛生面について、気になっている人もいると思います。正直言って大丈夫です！ 私も衛生的によくはないだろうという勝手な先入観を抱いて、最初は屋台で売られている食べ物は決して口にしませんでした。しかし、一度食べてみると結構美味しいし、身体が不調になることも滅多にあり

ませんでした。むしろ、食べ物安くて美味しく、留学中に7~8kg太った人もいました(笑)。

行く前には長いと思っていた留学、終えてみると意外と短いものです。この限られた時間の中で、勉強以外にできることは何でも積極的にチャレンジすべきだと思います。留学を通して、たくさんのことを学びました。語学力が伸びただけではなく、留学前と今では、中国に対する考え方、異文化に対するものの見方などの意識も大きく変化しました。

大切なことは、怖がらずに一歩を踏み出してみるということです。留学前は、一人でご飯を食べに行くことすら出来なかった私が、一人でいろいろなところに行くことができるようになりました。一人で行動できるようになったということが、大きな成長です。上海での留学生活は、私にとってかけがえのない宝物です。



廣山 夏帆 台湾：台湾師範大学



2015年8月23日から1年間、男子1人、女子6人の計7人で台湾国立師範大学へSAに行きました。これから始まる1年間の新しい生活に期待と不安が入り混じったなんとも言えない気持ちと共に、飛行機に乗り込んだことを今でも鮮明に覚えています。私にとっては初めて実家を離れて住むことになり、ましてやそれが海外だったので、そこに対する不安ももちろんありました。台湾に着くと今まで習っていた簡体字とは少し違う繁体字の看板が並び、日本とは圧倒的に違うバイクの量にただ驚いていました。一年半中国語の勉強をして挑んだSAでしたが、いざその地に着いてみると、コンビニ

のお兄さんが話す言葉でさえ理解できず、改めてネイティブが話すスピードに圧倒されました。飲み物1つ買うにも、電車に乗るにも常に緊張感があり、まさにいち早く環境に慣れることに必死な状態でした。私達は学校内にある宿舎で、同じ中国語コースのメンバーと2人1組になってルームシェアをしました。毎日緊張感がある状態で寮に帰ってくると、近くに慣れ親しんだ仲間がいるという環境は、私にとって安心できる場所でした。こうして常に新しい発見ばかりの留学生活が始まりました。

私達が1年間通った国立台湾師範大学の語学学校は台湾の中でも有名な語学学校で、評判が良く、世界各国から中国語を学びたい人が集まります。国籍は様々で、私が知り合った人だけでも韓国、インド、タイ、アメリカ、ドイツ、ポーランド、イタリア、スイス出身の人がいて、それぞれ違う目的や夢を持って台湾に来ていました。年齢層が広いのもこの学校の特徴です。18歳から70歳ぐらいまで同じクラスでクラスメートとして共に授業を受けます。私達が参加した密集班は最大8人の少人数クラスです。3か月1タームとなっており、週5日1日3時間の授業を同じメンバーで受け、1タームで1冊の教科書を終わらせました。教科書は師範大学の先生が作成したものを使います。中国語圏での

生活に密着し、日常生活ですぐに使える内容となっていて、師範大学だけでなく他の学校でも使用されているようです。

授業の他に、1タームに1、2回校外学習も行われました。内容はクラスによって様々で、台湾名物のパイナップルケーキ作り体験や陶器作りなど、先生は私達留学生が普段自分たちで体験できないようなことや、行けないような場所に連れて行ってくれました。3か月に1回クラス替えが行われることもあり、1年間常にフレッシュな気持ちのままに授業を受けることができました。

もちろん、日々の生活は学校だけではありません。私はこの1年で日台交流会の企画や、現地の幼稚園で日本語教師のボランティアをし、台湾人とバンドを組んでライブも行いました。北京や上海といった他の留学先と違い、学校単位で行われる行事や留学生が大学のクラブ活動に参加できる機会は少ないですが、受け身にならず自分でやりたいことを探して積極的に行動することができる、というのは台湾ならではの魅力ではないかと思います。私も実際、同じ師範大学に通う留学生と他の大学に通う台湾人の大学生と、3人で日台交流会を開きたいという話になり、企画、集客、運営を全て3で行いました。もちろん最初からうまくいったわけではなく、日常会話以上のコミュニケーションを中国語でとることや、現地の人を対象とする集客に苦戦することもありました。その反面、得たものや学んだこともたくさんあります。日本人以外の人と何か一つのものを作り上げることで気づく習慣や価値観の違い、いかに自分の視野が狭いかということも思い知らされました。共に作業することでお互いの良さや悪さを指摘しあえる仲間が台湾にできたことは、私にとってとても貴重で、実際現地で生活したからこそ得られたものだと思います。

このような経験から、私にとって台湾で過ごした1年間はまさに「出会いの1年」でした。これは台湾の方が親日家であることも関係しています。私の拙い中国語にもちゃんと耳を傾けてくれる方が台湾にはたくさんいます。買い物していたお店の店員さんと仲良くなり、気づいたら30分立ち話していた……なんてこともありました。その距離感の近さに初めは戸惑うこともありましたが、語学の勉強をしていて、コミュニケーションの機会をできるだけ増やしたい私にとってはぴったりでした。あとは公共交通機関が使いやすく、移動が便利で、物価が安く、ご飯の味付けも私には合っていた、ということも1年間生活する上でとても大切な条件でした。

同じ派遣先で生活していても、私達の留学生生活は7人7色でした。限られた1年間で何をするかが大切だと思い知りました。周りに支えられ、環境に恵まれ、悔いのない1年間を送れたことは私にとって大きな財産です。皆さんももし GC から留学するのであれば、後悔しない選択をしてほしいと思います。そしてその選択肢の中に台湾があれば私としては嬉しいです♪





留学生の声

同志社大学は積極的に留学生を受け入れており、本学部の日本語コースには主にアジア圏からやってきた学生が多数在籍しています。日本にしながら異文化体験・理解ができる環境があることは GC 学部の大きな魅力の一つです。これからのグローバル社会を共に支えてゆく仲間である留学生たちですが、まだまだ日本社会にはそれを実現する態勢が整っていないようです。ここでは、日本語コースの学生たちの就活や日本語学習に関するリアルな声を紹介します。

上田 未来

日本での就活を考えている留学生へ「日本での就職のアドバイス」

庄子誠

企業のグローバル化や日本の少子化による労働力不足などのため、日本企業は外国人材の採用に力を入れています。しかし、留学生の就職状況は明るいとは言えません。日本での就職を考えている留学生の皆さんの参考になるように、内定を得た留学生の先輩からのアドバイスを紹介します。

先輩のプロフィール

名前：張若文（チョウ・ジャクブン）

出身：中国湖北省

就職先：製薬会社

アドバイス① 早い段階で準備する

私たち留学生は、早いうちに日本の就職活動の手順と注意すべき事項を知っておいたほうがよいと思います。就職活動の本番の時、想像以上につらいかもしれないので、事前の準備は非常に大切です。

準備段階

1. 就職サイト（「リクナビ」「マイナビ」など）に登録
2. 同志社大学のキャリアセンターを活用する
3. キャリアセンターが開催する企業学内説明会に参加する
4. 業界マップを見て、業界と代表的な企業の状況を把握する

アドバイス② 自己分析をしっかり行う

まず、「自分はどのような人なのか」をしっかりと考えます。自分の強みと弱み、価値観、最もモチベーションを感じることなどを分析します。自己分析がきちんとできたら、自然にどんな仕事をしたいか、どんな業界で働きたいかが分かってきます。

ちなみに、留学生だから日本語はもちろん、自身の母国語が使えることが有利であると考えられる人は多いかもしれませんが、日本企業で働くと、英語能力も必要です。英語は世界の共通語であり、世界中の人を相手に仕事をするためには、日本企業といえども、英語は避けて通ることができません。それゆえ、英語力も身につけておいた方がよいと思います。

カルチャーショック「言葉にこそ文化の差」

庄 子誠

5年半前、私は中国の福建省から来日しました。一般の外国人留学生と異なり、私は日本に行きたくて訪日したのではなく、母が日本人と再婚したため、母に連れられて来日しました。日本の高校に通い、日本人の継父と暮らし、留学生より日本人と接触することが圧倒的に多かったです。そのため、異文化による誤解や摩擦を経験したことも多かったです。

さっそく立ちをはだかる「敬語の壁」

自分が経験した最初の文化摩擦を紹介します。日本は上下関係に厳しい社会。下の者は上の者に対し、敬語を使わなければいけません。しかし、自分の母国である中国では上下関係の意識が非常に薄く、敬語すらほとんど存在しません。この文化の違いにより、私は初めての日本の学校の登校日に思わぬ事件を起こしてしまいました。当時は来日してから、1か月しか経っておらず、日本語は基本の挨拶しかしゃべれない程度でした。初登校の日は非常に天気良く、登校すると、副校長先生が学校の入り口で生徒たちに「おはよう」と挨拶していました。私も「おはよう」と先生に声を掛けられました。すると、敬語という存在をまだ知らなかった私は「よっ、おはよう」と返事してしまいました。当時の副校長先生の複雑な表情を未だにはっきり覚えています。その後、通訳の先生を通じ、副校長先生にお願いして日本の挨拶文化を教えてくださいました。

空気を読む？

ほかにも、家庭科で日本人の同級生と一緒に小籠包を作りました。味の感想を聞かれて、「この小籠包美味しくない！」という一言だけで教室を非常にまずい雰囲気にした経験もありました（空気を読む日本文化と、何でもはっきり言う中国語文化の差）。また、マクドナルドで会計したあとに、店員が「ありがとうございます」と言うと、私は元氣よく「どういたしまして」と答えたこともありました。

日本での生活から学んだ最も大切なことは、日本語は人の態度や気持ちと深く結びついているということ。私の一言で周りの人が驚いたり、悩んだりするように、人とことばの結びつきが中国語以上に強い文化なのではないかと思いました。また、文化は言語に強い影響を与えるため、ある言語を学ぶことでその文化に対する理解を深められると思っています。これも私が日本語コースに入った理由の一つです。

私の外国語学習の秘訣

金ナリン

私は日本語が好きで GC の日本語コースに来ており、また、この大学でドイツ語も3年間履修しています。こんな私が考える外国語学習の秘訣は愛情です。

日本語のきっかけはアイドルグループ

私が日本語を学び始めたきっかけは嵐です。私が中学生のとき、教室で私の前に座った子が嵐の大ファンでした。それでその子は私にいろんな嵐の番組を見せてくれました。私は家に帰って嵐についていろいろ探し、番組も見ました。そのうち、私は嵐のファンになっていました。私は嵐の歌と歌詞を MP3 に入れていつも見ていました。歌詞を見ながら、まずはひらがなとカタカナの読み方がわかるようになり、次は助詞がわかるようになり、文の意味がわかるようになりました。そして私は日本語をもっと学びたくて外国語高校の日本語科に進学し、GC の日本語コースに進学しました。

ドイツ語のきっかけはミュージカル

次に私がドイツ語を学び始めたきっかけは、高校生のときミュージカルのエリザベートを YouTube で観て、そのミュージカルが好きになったことです。私はそのミュージカルの曲を iPod に入れてずっと聞きました。歌を聞きながら歌詞を見てだんだんドイツ語の読み方がわかるようになり、単語の意味もわかってきました。そして私はドイツ語をもっと勉強してみたいと思いました。そんな私が同志社大学に入学できたのはとても運が良かったです。韓国の大学では、普通は英語と日本語と中国語以外の外国語は初級レベルの授業しかありませんが、同志社大学ではいろんな外国語の授業が上級までであるからです。ドイツ語をネイティブ・スピーカーの先生に教えていただけるとはめったにないことだと思います。面白い先生方とドイツ語を勉強しながら私はドイツ語がよりいっそう好きになり、すでに3年間勉強し続けています。今私はドイツ語インテンシヴVを取っています。また、2年生のとき、語学のコミュニケーション能力別のレベルを示す CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠) の A2 の試験も受かりました。ドイツ語の魅力は発音と規則的でわかりやすい文法にあると思います。

以上のように振り返ると、私は言語を学ぶときには何かを愛することが大事であることがわかりました。そして私は日本語とドイツ語をより深く学べる機会を提供してくれた同志社大学にとっても感謝しています。



GC 学部 の 日常生活

本学部に入学することを希望されている高校生の皆さんをはじめ多くの方々から、実際にGCの学生はどのような大学生活を送っているか知りたいという声を数多くいただきました。その期待にお応えすべく、本学部1回生の編集委員が中心となってこのコーナーを執筆しました。1週間の授業時間割や、それぞれの授業について簡単に紹介しています。また、学業のみならずサークル活動やアルバイトについても触れていますので、GC学部生の大学生活をより「リアル」に感じていただけたと思います。本企画が、本学部に興味をお持ちの皆さんにとって、大学生活をイメージする上で、参考にしていただけたら幸いです。

それでは、GC学部生の日常を覗いてみてください。

浅野 潤

小西 真愛
中国語コース
1回生



こんにちは、中国語コース1回生の小西真愛です。

GCは温かくて、人との繋がりが濃い学部です。今回私の1日を皆さんに紹介することで少しでも大学生活のイメージを掴んでいただけたら光栄です。

時間割

	月	火	水	木	金
1	英語コミュニケーション 授業はネイティブの先生により英語で行われます。	中国語リスニング 実用性のあるフレーズを聴けるようにするだけでなく、書き取る力もつけます。	中国語講読 中国語の文法について学びます。		中国語会話
2	宗教学	国際教養論	基礎演習2 毎回担当者が中国問題について探究し発表します。ゼミ形式で行われます。		
3	中国語ライティング 中国語の作文力をつけます。		経済学		中国語講読
4	中国語会話 ネイティブの先生により中国語で授業が行われ、ペアワークを通じて日常会話などを学びます。				英語リーディング CNNなどの新聞記事を英語で読み、教養を深めます。
5					

中国語コースはご覧の通り、中国語を本格的に学ぶことが出来ます。また、一つ一つの授業が少人数制なので、質問もしやすい環境です。勉強に意欲的な学生が多いので、お互い切磋琢磨して授業を受けることが出来ます。

1 中国語会話

この授業はネイティブの先生と10人くらいの学生で行われる少人数クラスです。すごくアットホームな授業で質問しやすい環境です。授業は主に中国語で行われるので実践力もつきます。

2 中国語講読

中国語の文法を学びながら読解力をつける授業です。テキストの本文をニュアンスを含めて正しく日本語訳できることを目指しています。

1日のタイムスケジュール

5:30	起床！朝は得意なほうです。
6:30	出発！通学時間は単語を覚えたりしてます。
9:00	授業開始！空きコマは課題をして、ランチは友達と食べてます。
18:00	サークル開始！野球サークルに入っています。
21:00	帰宅！ご飯を食べます。
22:00	次の日の小テストの勉強をしたり、予習復習をします。
0:00	自由な時間です。お風呂に入って、趣味に時間を使います。
1:00	就寝！1日お疲れさま。



↑
GCの自習室で課題をしている様子です。

←授業風景
これは講読の授業で友達と練習問題の答えを確認しあっています。



授業は見た目より忙しいです。
合間には友達と勉強を教えあう事もあります。
メリハリが大切ですね！

時間割

	月	火	水	木	金
1	Communicative Performance	Preparation for Academic Studies			French
2		建学の精神とキリスト教	Progress in Reading		心理学
3	スポーツ・パフォーマンス		Introduction to Japanese Culture	French	Communicative Performance
4				Progress in Writing	Threshold Seminar
5			French		

僕は必修の授業以外に一般の科目は3つだけです！

必修ではフランス語が週に3回あり、ネイティブの先生に教えてもらう日もあります！授業の間の時間では課題をしたり、ジムへトレーニングをしに行ったりしています！

そしてここで僕のお気に入りの授業を紹介します！木曜4限のProgress in Writingです！毎週のエッセイ練習は正直しんどいですが、数を重ねるごとに点数が伸びていくのが確認できるので楽しいです！秋学期の最後には自分でトピックを選び少し長いエッセイを書きます。僕はトピックを同性結婚にして、日本とニュージーランド、オーストラリアの友達にアンケートをとりました！

1日のタイムスケジュール

8:00	起床！お昼ごはんを作って大学に行きます！
10:00	今日はディスカッションの授業！準備は万端！
12:00	お昼にベーグル食べて次の授業まで明日の予習をします！
14:00	3限目は体育です！勉強が多い中では体を動かすのがストレス解消に！
16:00	今日もバイトへ出発…課題終わるかな～
18:00	バイト頑張ってます。休憩中に課題いつも頑張ってます！
20:00	バイトを終えて帰宅中！ 電車でハリーポッターの新作イギリス英語バージョンを読んでいます！
22:00	晩御飯！そして残った課題を終わらせてやっと趣味に時間をあてられる！

→
フランス語スピーチ練習の合間
に撮られた写真です！



← 友達がプレゼンしている写真です！

→
自習室での1枚！
この時間帯は1回生が多いな～



堺 遼哉
英語コース
1回生



日常生活のコーナーへようこそ！1回生の堺遼哉です。
GCは勉強を全力で頑張りながら、しっかりスケジュール管理さえすれば、実家から1時間以上かけて通っていても、バイトもサークルもできるので毎日充実しています！
また少人数で皆仲が良いので毎日楽しいです！
そんな僕の日常生活をどうぞ！

時間割

	月	火	水	木	金
1	Communicative Performance プレゼンやディスカッションを英語でするクラスです。	Preparation for TOEFL 留学にスコアが関わります！			Chinese
2		現代文化概論	Progress in Reading 学生が先生役をして授業をします。		スポーツパフォーマンス・バスケ
3		Chinese 第2言語の時間です。	Introduction to English Culture 多様なバラエティーの英語を学びます！		Communicative Performance
4	Introduction to Global Communication			Progress in Writing アカデミックライティングを学びます！	Threshold Seminar 留学の準備の授業です。
5			Chinese		

Communicative Performance では、プレゼンのやり方とルールを学び実践します。
最初に比べて皆パワーポイントの出来もよくなり、英語で説明することがとても上手になりました。

1日のタイムスケジュール

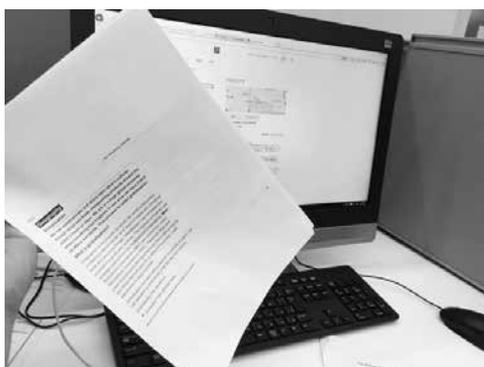
6:00	起床！実家から通ってるので、早起きはこの年になっても苦手です（笑）。
7:30	もうこの時間には電車です。電車の中では授業の資料を読んだりしてます。
9:00	授業開始！今日も1限からバリバリ勉強します！
12:30	お昼は友達とご飯を食べて、週に1回FCで様々な教養を深めています！
14:00	空きコマを使って課題を終わらせたり、友達や先輩といろんな話をします！
18:00	さあ！大学が終われば予備校のバイトです！がんばろう！
23:00	帰宅！家に帰ってここから自由な時間です。
1:00	そろそろ寝ます。今日もお疲れ！明日も頑張ろう！！



↑ Communicative Performance!
プレゼンの授業です！



→ お昼ご飯です！



← 自習室で課題をこなし、勉強をします。



→
ほかにも休みの日にGCの友達と集まって
キャンプなどをしました！ So fun!!

2016年度卒業研究テーマ

—英語コース—

Advanced Seminar2 ① (担当 松木啓子)

梶原拓也	Ritual Communication in Tennis: The Construction of Elegance
青山祥穂	Have the Rites of Death Changed?
浅井健斗	First-contact Communication through Smoking
林 毅	The Ritual Power of Alcohol in Communication
加納理衣	Ritual Elements in Conversation at First Encounters: Focusing on Job-hunting Situations
木下慧美	Ritual Communication in Dance
小林真奈	A Secular Journey to a Sacred Place: The Ethnography of Camino de Santiago
児島麦穂	Joking in Interaction
村上しずか	The U.S. Presidential Election as Ritual Communication
真田峻太郎	The Ritual Communication of a Good Waiter: Effective Use of Positive Politeness
杉本朱音	The Significance of Everyday Worship at a School Chapel
豊口七歩	Ritual Communication in Service Encounters: The Importance of Politeness

Advanced Seminar2 ② (担当 玉井史絵)

橋角亮介	Charisma or Teamwork: Ideal Leadership in <i>The Romance of Three Kingdoms</i>
小畑俊樹	The Artificial Others: Representation of Robots in <i>Chappie</i>
田上 葉	The Influence of Technology on Human Communication in Spike Jonze's <i>Her</i>
豊村 悠	Two Contrasting Methods of Identity Formation in <i>Saraba</i>
米山真由	The Representation of Free Will and Modern Society in <i>The Truman Show</i> : Truman as a Prisoner and a Hero

Advanced Seminar2 ③ (担当 吉田優子)

管 勇輝	A Guide of Asian Englishes and Education Systems
後藤沙織	Welsh: A Distinct Language
畑美智子	Accent Variations in Hyogo Prefecture
今石翔生	New York English in Modern American Society
家志千尋	Distinguishing Factors of an International Common Language: A comparison of English and Esperanto
粕渕あゆみ	Linguistic Features of Japanese and English: Focus on Greetings and Refusals
奥野 梓	Being a Bilingual: A Linguistic and Cultural Perspective
小澤かおり	A Comprehensive Perspective of Keihan and Gifu Accents: Comparison with the Tokyo Accent
盛 詩瑠	The Supra-segmental Phonology of Mandarin Chinese: Focus upon Tone Sandhi
鈴木のどか	Language and Identity: Features of Australian English
上田実佳	Effective Methods for Teaching English Pronunciation

Advanced Seminar2 ④ (担当 長谷部陽一郎)

- 平田若菜 An Analysis of Phrasal Verbs from Cognitive Linguistic Perspectives
 今谷隼人 An Analysis of Business Slogans Based on Relevance Theory
 山田雅裕 Aspects of “Role Language” in Japanese Novels
 青山夏穂 The Language of American Presidents: A Cognitive Linguistic Analysis with Special Emphasis on Metaphor and Metonymy
 入江杏子 A Contrastive Study of Language for Apologies in Japanese and English
 小林美月 *DO* Language and *BECOME* Language: A Contrastive Analysis of English and Japanese Using Text in Novels
 久次米智 The Relationship between Compliment Words and their Effects on the Mind
 宮崎 潤 Overlaps of Meaning Scopes of *Kanji* Characters: An Analysis of Japanese Perspectives
 野口史帆 A Better Way to Speak Effectively: A Study Based on Comparison of English and Japanese
 小川貴帆 Subjective and Objective Construal in Movies: A Comparative Analysis of English Transcripts and Japanese Subtitles
 大西冬菜 A Relevance Theoretical Analysis of Advertising Text
 大山真歩 Functions of Viewpoint Selection: An Integrated Analysis of Images in Films and Linguistic Expressions
 空井紗也佳 The Subjective Nature of Japanese Mimetic Words: Effects and Practical Applications
 高橋 萌 An Observation of Epistemic Modality in Japanese, English, and Chinese
 堤 賢吾 A Cognitive Analysis of Advertisement Text, with Special Reference to the Automobile Industry
 山本優衣 English Textbooks and Practical Communication Skills: A Comparative Study of English Textbooks in Japan, China, and Korea
 山下美菜子 An Observation of “Considerations” in Japanese and English Conversations
 矢能京香 Pronouns and Person Deixis in Japanese: A Cognitive Linguistic Study

Advanced Seminar2 ⑤ (担当 竹田宗継)

- 藤原麻緒 New Styles of Office Layout to be Adopted by Japanese Companies: Establishing Better Employee Communication, Corporate Culture and Work Environment
 廣田理也子 The Impact of Japanese *Omotenashi* Business Culture on Global Business: The Creation of Long-term Benefits
 堀本愛美梨 Remakes of Japanese Horror Films in Hollywood: Adapting to the Culture and Religion
 井上諒一 The Simultaneous Recruiting System of New Graduates in Japan: A System Well-suited for a Stable Society and Future Growth
 岩崎航輔 The Needs of Targeting the Global Market and its Complex Structure in the Japanese Film Industry
 加藤聖人 The Stronger Global Mindset Required for Japanese Manufacturing Companies Entering the Indian Market: A Comparison with Korean Companies
 木下雄斗 Changing Behavior of Japanese Consumers with More Independent Activities: An Indication of the Shift from Collectivism to Individualism
 桑原菜々美 A Trend in the Travel Industry: “Female Travel”

- 南 侑希 Japanese Companies Should Not Adhere to Standard Employment Systems and Communication Styles to be More Successful Through M&A
- 森本莉子 An Analysis of Key Success Factors for Developing Female Executives in Japan
- 本倉裕大 The Impact of New Marketing Channels on Coffee Farmers in Ethiopia: Fairtrade, Coffee Cooperatives and Corporate Activity
- 中川広樹 The Prospect of Inbound Tourism in Japan: The Needed Shift Towards Tourism in Regional Areas
- 折坂奈津美 Introduction of Tipping Practices in Japan: An Effective Way to Enhance Customer Service
- 笹井真奈 Promoting a Cashless Society in Japan: More Effective Consumer Education and Marketing Communication

Advanced Seminar2 ⑥ (担当 窪田光男)

- 秋元俊介 The Relationship between Social Class and Naming: An Analysis of Kira Kira (Bizarre) Names in Japan
- 孫 賢二 Language and Society in a Prison: Shedding Light on Two Prison-based Television Shows in the U.S.
- 秋山みどり Ideological Differences between Teenage Girls in Japan and the United States
- 古沢侑佳 A Comparison of Japanese and English Cosmetic Advertisements in Regard to Language Use
- 今西 菖 Gender and the Use of Tasty Seasonal Onomatopoeias
- 井上優菜 Functions of Stickers: The Effects of Gender Differences in LINE Communication
- 井上侑大 An Analysis of "(笑)" in the LINE Communication of Male University Students
- 上本悠香 Women and Their Way of Speaking
- 菊池春花 Perceptions of First and Foreign Languages on T-shirts: A Look at Japanese and English T-shirts
- 喜多里奈 The Image of Japanese Women Who Appear on TV News Programs
- 草間 翠 Sexism and Exaggeration of Femininity in Japanese Translations of Disney Films
- 山口博也 Characteristics of Gay Speech (Onee Kotoba) and People's Perception of Them
- 山本由佳 Why Are New Titles Created for Movies When They Are Marketed in Japan and English-Speaking Countries?

Advanced Seminar2 ⑦ (担当 Bettina Gildenhard)

- 天野洋介 Banal Racism: A Hidden Threat in Variety Shows
- 福澤郁実 Can Japanese Dramas Make New Narratives for LGBT People?: An Analysis of the Drama *False Marriage*
- 林 由佳 Guerrillero Heroico Che Guevara: the Making of His Image
- 岩城夏里奈 Between Image and Reality : Working Women in Japanese Media
- 中西千尋 The Great Chiune Sugihara: A Desk Hero
- 浦川美奈子 Representation of *Hâfu* in Japanese Media: Between Self Performance and Stereotype
- ウルフ魁ジョン “I am Japanese: What makes me so special”: The TV program *Himitsu no Kenmin Show* and the Construction of Uniqueness

Advanced Seminar2 ⑧ (担当 南井正廣)

塩野有加	Suggestions for the Future of Suzuki Motor Corporation with Regards to Globalization
樋口かれん	All about Sugar
井口聖菜	The Bitter Reality of Sweet Chocolate: The Cocoa Industry in Ghana
伊藤涼香	The Globalization of Beauty Standards and the Beauty Industry
久保田裕賀	Café as a Commodity and Culture: The History of Coffeehouse in England and Café in Japan
松縄裕孝	How Wine has Impacted Society
銘田義孝	How Are You Doing These Days, Banana?
野村智勇希	Capitalism and Poverty
大西祐司	Why has Tea been Essential in England?
島井美帆	Arguments over Sugar in Britain

—中国語コース—

専門演習3 ① (担当 内田尚孝)

- 木下葉里 中国NGOの研究－「免費午餐」の考察を中心として－
蛭谷愛理 中国語圏における西洋音楽の受容・浸透・発展過程の研究－近代上海を中心に－
村地祥歌 現代中国における医療の現状と展望－「看病難、看病貴」問題を中心に－
長野礼奈 伝統中国の創造的破壊－魯迅と中国の「国民性」をめぐる－
永岡水矩 「歴史認識」問題と歴史教材に関する研究－『未来をひらく歴史』の可能性を中心として－
野見山玲奈 台湾アイデンティティ形成過程の研究－台湾住民の選ぶ道とは－
太田亜門 中国におけるインターネット・ショッピングの発展要因と今後の展望
高岡大地 香港「一国二制度」をめぐる考察－香港の「50年不変」を中心に－
吉田 翼 「知日派」への転換点－中国の反日とそれを克服する取り組み－

専門演習3 ② (担当 中西裕樹)

- 岡本駿平 (翻訳) Lowes『原来我不帥』(圓神出版社有限公司、2006年)
今井裕美 (翻訳) 哥舒意『中国孩子』(作家出版社、2015年) 第一章～第五章
河野隆英 (翻訳) 游汝傑『漢語与華人社会』(復旦大学出版社・香港城市大学出版社、2001年) 第二章
長島可奈 世代別にみる北京人の方言r化使用状況
中島圭代 (翻訳) 劉進才『語言運動与中国現代文学』(中華書局、2007年) 第一章「現代語言運動与民族国家的想像与建構」
寺田璃佳子 (翻訳) 信世昌『漢語標音的里程碑－注音符号百年的回顧与發展－』(吳南圖書出版股份有限公司、2014年) 序章「百年前的中国漢語標音符号之制定及後続發展」より
渡瀬美穂 (翻訳) 万建中『中国民間禁忌風俗』(中国電影出版社、2005年) 第六章「万事万物的禁忌 一、老鼠過街豈敢人人喊打－動物禁忌」
矢野光咲 (翻訳) 胡裕樹『現代漢語』(上海教育出版社、1993年) 序章

専門演習3 ③ (担当 唐顯芸)

- 清水優子 中国共産党の宗教政策について
池本真菜 台湾における観光の現状と今後の展望－台湾と中国の兩岸関係による影響を中心に－
岩城ほの香 中国人の対日意識について－新聞報道の影響－
梶原朋子 北京料理の変遷－その伝統と変化をめぐる－
加藤真澄 中国少子高齢化社会の現状とその展望
小林美樹 中国女性の身体意識と下着のこだわりに関する調査
幸田知子 中国人観光客の増加に伴う日本の宿泊施設不足問題の現状と解決策
坂口太一 中国の一方独裁体制と戸籍制度
末富夏希 中国の下水道と汚水処理について
鈴木 空 中国における戸籍制度と所得格差の関係
辻井 太 北京における日系企業のマーケティング戦略
上田麻衣佳 国民の自国政治への関心度と一方優位政党制の関係－中国と日本を例に－

山口彰吾 訪日中国人観光客の増加とインバウンド対策について
 函師悠翔 上海の経済発展に由来する大気汚染問題

専門演習3 ④ (担当 郭雲輝)

猪股雲龍 (翻訳) 王世凱・楊立英『东北方言与文化』(中国国际广播出版社、2014年)第三章「东北方言的应用及其应用价值」(91-126頁)

澤井悠哉 (翻訳) 陈章太主编『语言规划概论』(商务印书馆、2015年)第三章「语言规划与社会文化」(104-148頁)

濱本翔子 (翻訳) 万建中『中国民间禁忌风俗』(中国电影出版社、2005年)第五章「人生一世的禁忌」(123-144頁)

川口幸枝 (翻訳) 刘全花『现代汉语礼貌语言研究』(郑州大学出版社、2011年)第五章「方式篇」(124-147頁)

小嶋佳穂 (翻訳) 高原『当世界无法改变时改变自己』(湖南文艺出版社、2012年)第一章「突破意识之墙，做最优秀的自己」(1-28頁)および第六章「训练出众的社交技巧」(216-240頁)

是澤 智子 日中同形異義語—中国・台湾・日本から見る—

佐伯浩輔 (翻訳) 万建中『中国民间禁忌风俗』(中国电影出版社、2005年)第三章「日常生活中的禁忌」(22-27頁、29-31頁、35-40頁、46-51頁)

—日本語コース—

特別演習2 ① (担当 山森良枝)

金 ウヒ (キム ウヒ)

連体修飾節における動詞の活用形式—日韓語を中心とした対照研究—

張 若文 (チョウ ジャクブン)

日本語の取り立て詞「だけ」「ばかり」と中国語「只」

特別演習2 ② (担当 脇田里子)

陳 歌 (チン カ)

謝罪文化の根づいていない中国、謝罪文化のいき過ぎた日本

朴 炫宣 (パク ヒョンソン)

小説の方言翻訳における役割語としての日韓対照研究

特別演習2 ③ (担当 須藤潤)

李 戩 (リ ジェン)

日本語母語話者や中国語母語の日本語学習者の「何やってんの」のイントネーションは意図に応じてどう変わるのか

朴 書慧 (パク ソヘ)

音韻論から分析した日本人と韓国人の名前の特徴—音象徴を手掛かりに

張 巍 (チョウ ギ)

中国人日本語学習者と日本語母語話者のフィラー使用の比較研究—会話分析の視点から

趙 梓榘 (チョウ シケン)

複数の音調パターンによって、意味や意図、イメージをどのように使い分けているか

金 成恩 (キム ソンウン)

韓国語母語の日本語学習者・日本語母語話者の「えい」の発音実態について

編集後記

2016年は“Brexit”やトランプ氏の大統領当選など、世界の予想を裏切る出来事が立て続けに起きた激動の1年でした。テロや難民問題など、世界は多くの課題と不安を抱えたまま2017年へと突入しました。情報が錯綜し、正しい判断を下すことが極めて難しい時代になり、“Post-Truth”という言葉も話題になりました。

そんな今日、これからの未来を担っていく私たちに求められているものは何でしょうか。それは、先入観に囚われず物事を複数の視点から分析する力、価値観の異なる人と分かり合える寛容さ、自分から発信・働きかける主体性だと私たちは考えます。これらを学び、実践できる場がGCにあります。

ゼミや課外活動、留学、そして幅広い国際教養科目を通して得た知識と経験を活用し、複雑な世界の在り方を読み解く力を養います。実践的な外国語力をつけることでコミュニケーションの世界が広がり、異なる発想を持つ人々を受け入れる心を育みます。そして、好奇心を持って新しい分野に挑戦し続け、多方面で活躍できる人材がグローバルに羽ばたいていきます。

*Cosmos*の編集活動を通して、私たち学部生でも知らなかった新しい発見がたくさんありました。本誌を通して語学力だけではないGCの魅力を知っていただけたのなら本当に幸せです。第6号を手にとっていただき、ありがとうございました。

英語コース3回生 上田 未来・土田 大樹

2016年度 *Cosmos* 編集委員会

- 英語コース 4回生 井上 諒一、桑原 菜々美
3回生 浅野 潤、上田 未来、土田 大樹
1回生 岡部 和也 ジェームズ、小野 未雅、堺 遼哉、中野 かれん
- 中国語コース 4回生 野見山 玲奈
1回生 小西 真愛、市橋 侑里、吉田 悠花
- 日本語コース 3回生 金 ナリン、庄 子誠

グローバル・コミュニケーション学会

運営編集委員会・役員会

南井 正廣、内田 尚孝、中村 久男、吉田 優子、唐 顥芸、須藤 潤、鈴木 美紀子

Cosmos 第6号

2017年3月15日発行

発行 同志社大学グローバル・コミュニケーション学会
〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3
同志社大学グローバル・コミュニケーション学部内
Tel (0774) 65-7491 Fax (0774) 65-7069

編集 2016年度 *Cosmos* 編集委員会
グローバル・コミュニケーション学会 運営編集委員会

印刷 株式会社あおぞら印刷
〒604-8431 京都市中京区西ノ京原町15

